

「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（上） 第3部第1稿第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

51

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1983-10-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008445>

「信用と架空資本」(『資本論』第3部 第25章)の草稿について*(上)

—第3部第1稿第5章から—

大谷 禎之介

目 次

はじめに

1. 草稿第5章の外的状態
2. 草稿第5章の執筆時期
3. エンゲルスの編集作業の経過
4. エンゲルスの編集作業の内容
5. 草稿第5章と現行版第5篇との対応
6. 草稿第5章の5)と現行版との対応
7. 現行版第26章の表題と性格
8. 「架空資本」の意味
9. 草稿と現行版第25章との対応……(以上、本号所載)
10. 第25章および第26章冒頭の草稿
11. 草稿によって見た第25章の内容
12. 「信用制度の分析」
13. 「商業信用」と「銀行信用」

む す び

* Teinosuke Otani: *Über das Manuskript von „Kredit und fiktives Kapital“ („Das Kapital“, Buch III, Kapitel 25).*

Der Verfasser dankt dem Internationalen Institut für Sozialgeschichte in Amsterdam, das ihm den Zugang zum Archiv gewährt hat, namentlich Herrn G. Langkau und Frau U. Balzer, die ihm bei seiner Arbeit behilflich waren; ferner dem Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPdSU, das ihm ebenfalls die relevanten Materialien zugänglich gemacht hat, namentlich Frau L. Miskewitsch, Herrn W. Wygodski und Frau Antonova, die ihn dort unterstützt haben.

2 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

はじめに

MEGA 第2部第3巻として刊行されてきた『1861—1863年草稿』が完結した。「資本主義的再生産における貨幣の還流運動」を含む最後の3分の1も見ることができるようになり、『資本論』の成立過程を知るうえで、またその理論的内容の理解を深めるうえで、一挙に多くの手がかりが与えられた。しかし、マルクスの信用論にかんするかぎり、この最後の3分の1のなかには、貨幣取扱業に関する若干の興味ある記述といくつかの留保的文言とを除いて、新しい材料はほとんど含まれていないことが明らかとなった。こうして、マルクスの信用論は従来どおり、『経済学批判要綱』でのかなりの数の個々の叙述と『資本論』第3部第5篇のなかでのいとおうまとまった叙述とを基本にして見るほかはないことが確定した。このうち『要綱』での記述は、当面の対象である「資本一般」を論じるなかで、折にふれてその範囲外にある「信用」に言及したという性質のものだから、示唆するところは大きいとはいえ、やはり断片的なものに留まっている。これにたいして『資本論』第5篇第25—35章では、とにかく一貫して信用について論じられている。だから、マルクスの信用論とえば、なによりもまずこの第25—35章をあげなければならないだろう。

ところが、これまでわれわれが利用してきた現行版の第25—35章が、はたしてどの程度までマルクスの叙述を再現しているのか、改めて考え直してみる必要が生じてきている。それはいうまでもなく、マルクスの草稿——この場合には第3部の「第1稿」、すなわちエンゲルスのいう「主要原稿」——の調査によって、エンゲルスの手入れがこれまで一般に想像されていた程度をはるかに越えるものであることがわかってきたからである。

もちろんエンゲルスは第3部への彼の序文のなかで、第5篇をまとめるために彼がしなければならなかった作業について、次のように卒直に語っている。

「いちばんてこずったのは第5篇であったが、この篇はじっさい、第3部全体のなかで最もこみいった対象を取り扱っているものである。しかもまさにここをまとめているときに、マルクスは前述の重い病気の1つに襲われたのである。だからここにはできあがった草稿がないばかりか、これから埋めていくはずの輪郭をもつような構想さえもなく、ただ仕上げに手をつけたものがあるだけであり、それも、一度ならず覚え書きや注意書きや抜き書きの形での材料やの乱雑な堆積に終わっている。私がまず試みたのは、第1篇ではなんとかうまくいったように、すきまを埋めることや暗示を与えているだけの断片を仕上げることでこの篇を完全なものにし、この篇が著者の与えようと意図したすべてを少くとも近似的には提供するようにすることだった。これを私は少くとも3度はやってみたのだが、そのつど失敗したのであって、そのたびにむだにした時間こそは、遅延のおもな原因の1つなのである。結局、このやり方ではだめだと悟った。このやり方では、この方面の膨大な文献をあさりつくさなければならなかったであろうし、また最後になんとかつくりあげたものもマルクスの著書ではないものになったであろう。私に残された道は、ある程度のところで仕事を切り上げ、現にあるものをできるだけ整理することに限り、どうしても必要な補足だけをする、ということだった。こうして私は1893年の春、この篇のためのおもな仕事をかたづけたのである。」(MEW, Bd. 25, S. 12—13.¹³)

ここではエンゲルスは、マルクスの草稿には「これから埋めていくはずの輪郭をもつような構想 [ein Schema, dessen Umrisse auszufüllen wären]」さえなかったと言っている。そのような草稿から現行版の第5篇をつくりあげたのだから、エンゲルスの仕事が困難をきわめたことは想像にかたくない。

ところで他方、彼はこの困難であった彼の作業の痕跡を、刊行された第3部のなかになどの程度残しておいたかについて、次のように述べている。

「私が行なった変更や加筆が単に編集的な性質のものでない場合、ま

4 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

たは、マルクスが提供している事実的材料を加工して、できるかぎりマルクスの精神を保存しながらも私自身の結論を与えなければならなかった場合には、その個所全体を角括弧〔MEW版では弓括弧〕に入れ、私の頭文字をつけておいた。」(a. a. O., S. 11.)

さらに、第5章中の第33—35章については、とくに次のように述べていた。

「混乱」からあとの、そしてすでにそれ以前の個所で取り入れられなかったかぎりでの、すべてのこれらの材料から、私は第33—35章をまとめ上げた。そのためには、もちろん、関連をつけるために私の手でかなりの書き入れをしなければならなかった。これらの書き入れが単に形式的な性質のものでないかぎり、私の手になるものだということが明記してある。」(a. a. O., S. 14)

そして現行版には、エンゲルスの手によることが明記された、本文中の挿入や脚注がかなり見いだされる。したがって、エンゲルスの上の言によるかぎり、これらの個所以外のところで彼が手を加えていても、それは「単に形式的な性質のもの」だということになる。「形式的な」というのは、内容にはかかわりのない、と読むことができるだろう。だから、多くの論者が、マルクスの草稿が未定稿であることに留意しながらも、現行版の第5篇についても、エンゲルスのものであることが明記されていないところはマルクスの草稿のままになっているか、そうでなくてもせいぜい文体上の修正がなされている程度だろう、と考えてきたのも当然のことであった。

ところが、リュベールや佐藤金三郎氏の調査²⁾によって、エンゲルスによる「整理」や「補足」が、彼によることを明記していない広範な部分に及んでいることがわかってきた。わたくしも、1981年から1982年にかけてアムステルダムの社会史国際研究所とモスクワのマルクス=レーニン主義研究所とで第3部の「主要草稿」である「第1稿」を調べて、エンゲルスの手入れが彼によることを明記した挿入や注記以外のところできわめて広い範囲にわたっており、しかもその性質もしばしば「単に形式的なもの」

には留まらないこと、しかもこれは第5篇ではとくに著しいことを知った。

帰国後、第3部第1稿についてその全体像を紹介する小論³⁾を書き、そのなかで第5篇についてもとりあえず若干のことを記しておいたが、その後開かれた信用理論研究会1982年秋季大会で、報告者の報告を聞いているうちに、現行版第5篇の記述をマルクス自身によるものだと事実上前提した議論は実りないものになるおそれがあるように感じ、質問のかたちで次の3点を指摘した。

- ① マルクスが「第1稿」の第4章を書き始めたとき、彼はまだこの章で商業資本と利子生み資本との両者を論じるつもりであったが、この章の執筆中に、利子生み資本については次の第5章を当てることを決めた。第4章の表題に当初書かれてのちに消された部分は、「利子と産業利潤（企業利得）とへの利潤の分裂。利子生み資本」であり、新たに独立した第5章の表題は、「利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」である。

ここでは第1に、第4章を書き始めるときにもまだ、商業利潤、利子、地代のそれぞれに各1章をあてる構想は成立していなかった。第2に、上に記した2つの表題のどちらも「利子生み資本」で終わっており、「信用制度」という語がついていないが、これをたんなる「省略」や「欠落」とみることはできそうもない。

- ② 草稿第5章のうち、エンゲルス版第5篇の第21—24章に利用された部分は、それぞれが節をなしてこれらの章に対応しているが、第25章以降に利用された部分には、「5) 信用。架空資本⁴⁾」と「6) 先ブルジョア的なもの」との2つの節しかなく、後者はエンゲルス版の「第36章 先資本主義的なもの」にあたるのであって、結局、エンゲルスが第25—35章にまとめた部分の全体が、草稿では「5) 信用。仮空資本」となっているとみるほかはない。要するに、『資本論』のなかの信用にかんする部分の全体にこの表題がつけられているということにな

6 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

る。

- ③ この「5)」の冒頭、エンゲルス版では第25章の冒頭の、よく引用される有名なパラグラフは、第1稿では次のようになっていた。

「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある。ここではただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかの点をはっきりさせるだけでよい。そのさいわれわれはただ商業信用だけを取扱う。この信用の発展と公信用の発展との関連は考察しないでおく。」(Ms. I, S. 317.⁵¹)

一見して気づかれるように、エンゲルスは「分析」を「詳しい分析」に、「商業信用」を「商業信用と銀行信用」⁶⁾にそれぞれ変更したのである。このうち前者の手入れによって、マルクスは「信用制度の分析」それ自体がプランの範囲外だと言っているところが、分析はするが詳しくはしない、という趣旨に変わったのであった。「信用。架空資本」という表題の直後に書かれていたこの断り書きのもつ意味は重いのではないだろうか⁷⁾。

これらの点は、これまでのいろいろな議論に整合的な説明を求めるものだと考えられるが、この質問がきっかけとなって、信用理論研究会の次の大会である1983年春季大会で草稿第5章について報告をするように求められた。わたくし自身も、調べてきたものを遅くならないうちに整理しておきたいと考えていたので、その機会に草稿第5章と現行版第5篇との対応関係、すなわちエンゲルスの編集作業を調べ、また草稿の全体に目を通すことにした。1983年5月9日に行なわれた大会では、「『資本論』第3部第5篇の草稿について」と題して報告した。残念ながら、報告内容を十分に練りあげることができなかったので、与えられた時間内に重要な点を厳選した密度の高い報告をすることができず、尻切れとんぼのかたちで終わった。飯田裕康氏のコメントやフロアからの質問に便乗して、用意した資料についてはひととおりに触れることができたが、この資料そのものが、ぎり

ぎりのところでなんとかつくりあげたものであったので、誤記があったり、現行版の対応ページをのせることができなかつたりする不十分なものであった。

そういうわけで、草稿第5章についてはこの大会報告で紹介したことを含むさらに詳しい紹介をまとめる必要があると考え、第5章全体についての拙論の構想を練りかけていた。ところがその後、身辺急に慌しさを加えるようになり、しばらくは落ち着いて仕事ができない見通しが強くなってきた。考えあぐねたすえ、予定を変更して、とりあえず、第5章の全体にかかわる若干のことを述べるとともに、現行版第25章に相当する草稿部分を紹介しておくことにした。このさき、時間がとれしだい、第5章のこれに続く部分を少しずつ紹介していきたいと考えている。

ところで、じつはずで1970年秋の信用理論研究会大会で、佐藤金三郎氏が第3部第1稿の調査結果を報告されていた。そのさい、配布資料と口頭での補足とで、多くの新しい重要な事実が紹介されていた。それには、第5篇についても第25章冒頭のパラグラフと草稿との相違をはじめ、第5篇を読むさいに留意されるべきいくつかの個所の紹介が含まれていた。そのご佐藤氏は諸労作、とりわけ『資本論』第3部原稿について(1)で、第3部第5篇についても言及されている。ところが、それ以後のマルクス信用論の研究でも、佐藤氏によって明らかにされたかぎりでの新事実でさえも、利用されることは多くなかったように思われる⁹⁾。それはおそらく、第5篇については紹介されたもののほかにもまだ多くの草稿との相違があると思われ、それらの全体が——MEGA などによって——つかめるようになるまでは、紹介されたかぎりの断片的な新事実はいちおう無視しておいたほうが安全だ、というもっともな判断から来たものであろう。

それはともかく、本稿では、佐藤氏の上述の報告と諸労作やリュベールの『資本論資料』とそれへの注解などですでに明らかにされている事実も——それらだけ省くというわけにはいかないので——含めて、草稿についてできるだけ多くの情報を提供するように努めることにする。したがっ

8 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

て、主要内容は第25章にかかわるものであるが、機会あるごとに草稿の他の部分へも言及し、引用したいと思う。できることなら、草稿からの引用にはすべて原文をつけたいのであるが、社会史国際研究所の了解を得ないで1か所7行以上の引用はできないことになっているので、基本的には訳文のみを掲げることとし、ときどき原文ないし原語を挿入することにした⁹⁾。この点、読者諸兄姉のご了解を得たい。

- 1) *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, Berlin 1964, S. 12-13. 以下すべて同様に略記する。なお、とくに断らないかぎり、いっさいの引用文中の下線は原文中の強調(イタリックによるものを含む)であり、傍点は引用者によるものである。引用文中の〔 〕での挿入は、原語の指示も含めてすべて引用者によるものである。
- 2) 佐藤金三郎「『資本論』第3部原稿について」(1), 『思想』561号(1971年4月); (2), 同564号(同年6月); (3), 同580号(1972年10月)。 *Matériaux pour le deuxième volume du Capital. Oeuvres de Karl Marx, Économie II. Édition établie par Maximilien Rubel, Paris 1968, p. 865-1488 et 1739-1852.* 以下, *Matériaux* と略記。
- 3) 「『資本論』第3部第1稿について—オリジナルの調査にもとづいて—」, 『経済志林』, 第50巻第2号, 1982年。
- 4) これまでわたくしは、fiktiv の訳語として、長谷部訳にならって「仮空な」としてきた。しかし、日本語でふつうに使われる「架空」という漢字ととくに区別して「仮空」とする理由がないと考えるにいたったので、本稿から「架空な」とすることにした。
- 5) 『資本論』第3部第1稿, 317ページ。以下すべて同様に略記する。
- 6) 原語は *der kommerzielle und Bankierkredit* である。この語が「商業信用」と「銀行信用」という2つの信用を並記したものとなっているのかどうか、やや疑問がないではない。この点については、本稿10.のなかの該当部分につけた注(**)のなかで触れているので参照されたい。
- 7) 本稿のここまでの部分は、信用理論研究会1983年度春季大会での「報告要旨」に加筆したものである。
- 8) 浜野俊一郎氏は論稿「信用論体系の諸問題」(『インフレと金融の経済学—飯田繁教授古希記念論文集』, ミネルヴァ書房, 1979年, 第7章)で、佐藤氏の信用理論研究会大会での報告資料から、現行版第27章の末尾近くにある1パラグラフ(の中途まで)を引用して、エンゲルス版でのこのパラグラフの文面によることの危険を指摘されている。これは、佐藤氏の報告を利用し

た数少ないものの1つである。なおそこで示されている原文はわたくしの調査とほとんど一致しているが、わたくしもこのパラグラフをどのように読むかは第5篇の構成の理解を左右するほどの重要性があるものと考えているので、ここにその個所の原文と訳文とを掲げておこう。

Wir haben bisher hauptsächlich d. Entwicklung d. Creditwesens [u. d. darin enthaltne latente Aufhebung d. Capitaleigenthums] mit Bezug, hauptsächlich auf d. productive Capital betrachtet. Wir gehn jetzt über auf Betrachtung d. Zinstragenden Capitals als solchen [d. Effects auf es durch d. Creditwesens, wie d. Form, die es annimmt.], u. sind dabei überhaupt einige spezifisch ökonomische Bemerkungen noch zu machen. (*Ms. I*, S. 327; *MEW*, Bd. 25, S. 457.) (後半の角括弧のなかにみられる Creditwesens の最後の s は不要であり、誤記であろう。)

「これまでわれわれは主として信用制度の発展〔そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止〕を、主として生産的資本に関連して、考察した。いまわれわれは、利子生み資本そのもの〔信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本がとる形態〕の考察に移るが、そのさい総じて、なお若干のとくに経済学的な論評を行なわなければならない。」(草稿中の角括弧は訳文では〔 〕で示す。)

- 9) 旧稿「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章の草稿について)(上), 『経済志林』, 第49巻第1号, (下), 同第2号, では, 社会史国際研究所からの明示的な制約を聞いていなかったのので, 原文をそのまま長文にわたって引用した。しかしその後, 正式にこの制約を知らされる機会があり, 以後は旧稿のような発表形式はとれなくなったものと判断している。

1. 草稿第5章の外的状態

第3部第1稿の全体についてはその外的状態を中心に, 別稿¹⁾できわめて大ざっぱな紹介をしたが, そのさい, 第3部第5篇にまとめられた草稿部分についても若干のことを記しておいた。やや重複するが, ここでも第3部第5篇相当部分についてのみ, 外形的なことを述べておこう。

第1稿のなかで現行版第5篇「利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本」に相当するのは, その第5章「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本」である。エンゲルスはこ

10 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

の第5章を編集して現行第5篇をつくりあげたのであった。

第5章が書かれているのは、第1稿のはじめから数えて第70番目から第102番目までの全紙で、このうち第80全紙と第88全紙とがそれぞれ2ページ(この2枚は4ページあった同じ1全紙を2分したものである)であるほかは、すべて4ページからなるフォリオである。したがって総ページ数は128ページであるが、最後のページはページ番号(405)だけ書かれていて、本文は書かれていない。本文が書かれているのは127ページということになる。マルクスがつけたページ番号は286ページから始まるが、途中325ページのほかに325 a および325 b ページがあり、340ページと341ページのあいだにページ番号のないページがあり、352ページのほかに352 a, 352 b, 352 c, 352 d, 352 e, 352 f, 352 g, 352 h, 352 i, 352 j の各ページがあり、他方、386—389ページと399ページとが飛ばされていて存在しない。

以上の全紙に用いられている紙はすべて同じものである。すなわち、サイズ432×342 mm の2つ折り、無野でやや薄い青色、透かしのないあまり上質ではない薄手の紙である。ちなみにこの紙は、第4章の全部と第6章の最初の3全紙とも共通のものである。

マルクスは、1861—63年草稿のノート第18冊1139ページに「第3部 [Teil] 「資本と利潤」」のプランを記したが、その第8の項目は、「産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」であった。すなわち、商業資本と利子生み資本とは同じ項目のなかで論じられることになっており、しかもこの項目の表題でみるかぎり、まず「産業利潤と利子とへの利潤の分裂」が掲げられ、そのあとに「商業資本」が続く、というようになっていた²⁾。

マルクスが第3部第1稿の執筆を1時中断してその間に書いたと推定されている³⁾第2部第1稿では、第3部の第4章で商業資本と利子生み資本との両者を論じるつもりであったとみられるが、その第4章について、

「利子生み資本のところ（第3部第4章）」および「利子生み資本についての第4章」と書いていた⁴⁾。

第2部第1稿を終えて第3部第1稿に戻ったマルクスが、そのあと⁵⁾第4章にかかったときにまず書きつけたこの章の表題は、「商品取扱資本および貨幣取扱資本。利子と産業利潤（企業利得）とへの利潤の分裂。利子生み資本」であった。すなわちここでは、まず商業資本について論じたあとに、利子生み資本について論じる予定であったとみることができる。ところが、この計画は当の第4章の執筆中に⁶⁾変更され、第4章の表題としては「商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への、すなわち商人資本への転化」が採られると同時に、後半の利子生み資本に関する部分は鉛筆で抹消されてしまった。

そしてあらためて第5章で、「利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」の表題のもとに、現行第5篇にまとめられた草稿が書かれたのである。

- 1) 前出拙稿「『資本論』第3部第1稿について」、参照。
- 2) *MEGA*, II/3.5, S.1861.
- 3) В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над «Капиталом» в 1863—1867 гг.*, 《Вопросы экономики》, №8, 1981. (邦訳：ヴェ・ヴィゴツキー、エリ・ミシケヴィチ、エム・チェルノフスキー、ア・チェプレニコ「1863—1867年におけるマルクスの『資本論』執筆の時期区分について」、中野雄策訳、『世界経済と国際関係』, 第56号, 1982年。)

その後、この論文の内容を含む次の論文が発表された。L. Miskewitsch/M. Ternowski/A. Tschepurenko/W. Wygodski, *Zur Periodisierung der Arbeit von Karl Marx am “Kapital” in den Jahren 1863 bis 1867*. In: „Marx-Engels-Jahrbuch“, Bd. 5, Berlin 1982.

- 4) 『資本論』第2部第1稿, 141ページ。邦訳, マルクス『資本の流通過程—『資本論』第2部第1稿—』, 中峯照悦・大谷 禎之介他訳, 大月書店, 1982年, 275ページ。
- 5) 前出の注3)に記した, 4人の筆者による共同論文では, 第2部第1稿と第3部第1稿との関係について, ここで述べたのとは異なった推論が行なわれている。両者の主張の違いと拙論の根拠とについては, 前掲拙稿「『資本

12 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

論』第3部第1稿について」123—133ページ、を参照されたい。その後、4人の筆者とのあいだで意見の交換を行なう機会があったが、その経過と内容については、すぐこのあとに掲げる付論Iで述べることにする。

- 6) 第4章のなかのどのあたりを書いているときにこの変更が行なわれたのか、ということについては、確実なことは言えないまでも、ある程度の推測はできる。この点については、上記拙稿、133—134ページを参照されたい。

付論I 第3部第1稿と第2部第1稿との関係に関する考証についての追記

昨1982年秋に拙稿「『資本論』第3部第1稿について」をまとめ、そのなかで、4人筆者の共同論文で行なわれている考証のなかのいくつかの点について疑問を述べ、また、第2部第4稿とそれとともに保存されている断稿との関係について、モスクワでのフォトコピーの入れ替わりという事実を指摘した。モスクワでは、チェブレンコ氏に、わたくしのアムステルダムでの再調査の結果を知らせる約束をしていたし、またミシケーヴィチ女史とヴィゴツキー氏には、日本語で書いた論文の場合でも「テーゼ」だけは送ってほしいと言われていたので、その約束を果たす必要が生じたのであるが、怠けて半年ほどを過ごしてしまった。ところが、本1983年3月に入手した „Marx-Engels-Jahrbuch“ の第5号には、4人筆者がふたたび、前出注3)にあげた論文を書き、このなかで、ロシア語で発表された4人の論文とその後チェブレンコ名で同じくロシア語で発表されていた論文(A. Ю. Чепуренко, *К Вопросу о датировке I-IV рукописей второй книги “Капитала” К. Маркса*, 《Научно сообщения и документы по марксоведению》, ИМЛ при ЦК КПСС, Москва, 1981.) とのなかで行なわれている考証を繰り返していた。そこで、わたくしのアムステルダムでの調査とその後の考証とによって得た私見を早急にモスクワに伝える必要を感じ、上記拙稿に記したいいくつかの論点を——部分的にはさらに詳述して——モノグラフのかたちにとまとめて、4月11日に4人に送った。その内

容は、すでに前記拙稿を読まれている読者には、次の3つの節の表題から容易におしはかられるであろう。

- 第2部第4稿とその前に書かれた断稿
- 第2部プランと第2部第1稿
- 第2部第1稿と第3部の「主要草稿」

それにたいして、4人から、5月31日付の連名の返書を得た。その内容は、大要次のようなものであった。

「貴論を興味ぶかく読んだ。この研究が、1863—1867年のマルクスの経済学草稿を収めるMEGA第2部第4巻の編集に実践的にも役立つことは疑いない。

「第2部第4稿とその前に書かれた断稿」の節については、ミンケーヴィチとヴィゴツキーが本年1月にIISGで行なった調査によって、貴見とまったく同じ結論に達していたので、異論はまったくない。

あとの2つの節での貴論の要点は、第2部第1稿のプランはこの第1稿の前にはなくて後に書かれたものであるから、マルクスが第3部第1稿を離れて第2部第1稿を書いたのは第3部第1稿の——われわれの主張する——256—275ページではなくて、182—243ページだ、ということである。

重要なことは、貴論がわれわれの、1863—1865年における第1, 2, 3部草稿の執筆順序の確認をくつがえさない、ということである。第2部第1稿とそのプランとの関係について言えば、MEGA第2部第4巻ではプランは無条件に第1稿の前に置かれなければならない。というのは、このプランの上にマルクスが書いた「I」という数字があり、これはプランが第1稿に属するものであることを意味しているからである。

われわれの考えでは、貴論の結論は今後の研究のための作業仮説と見なされうるものである。しかしながら、貴論の諸論拠が真剣な注意に値するものであることは疑いないとはいえ、われわれの現在の見解では、貴論の結論には疑問の余地がないわけではない。

14 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

われわれにはやはり、第1稿の構造はプランの編成に比べてより仕上げられた、したがってまたより熟した性格をもっているように思われる。このことはとくに、マルクスが第3章のプランはこの章の執筆中にやっと仕上げることができた〔だからプランには「第3章」としか書かれていない〕ということについて言えるし、第1章の表題が——プランでは「資本の Cirkulation」となっているのにたいして——「資本の Umlauf」となっていることについても言える。

第1稿を3章に分けようというマルクスの考えは第1稿の仕事のそもそもの始めからあったものである(草稿の1ページと19ページとを参照)。

資本の循環の3つの形態をマルクスはすでに1857—1858年草稿でも1861—1863年草稿でも分析していた(たとえば、後者の草稿のノート第15冊901ページを参照)。

第4稿の仕事にかかるとき、マルクスは、第1稿のプランが第1稿のまえに書かれたのかあとに書かれたのかにかかわりなく、第1稿のプランにすっかり依ることができた。第1章の表題に関するマルクスの動揺については、あなた自身がこう書いている——第4稿の仕事にかかったとき、マルクスははじめプランにある表題を使おうと決めたが、そのあとでそれを、第1稿のなかにある表題に変えた、と。しかし、われわれの見解では、こうした動揺は、第1稿のプランが第1稿以前〔「以後」の誤りであろう〕に書かれたことを証明するものではけっしてない。

最後に、マルクスがプランを書くときに使った綴り法は、プランよりもずっとまえに書かれた諸草稿でも、第1稿そのものでも、使われていたものである。たとえば、「第6章」——第1部(1863—1864年)の草稿の最後の章——は「Sechstes Kapitel」と〔つまり Kapitel ではなくて Kapitel と〕なっている(草稿441ページ)。この同じ草稿の442ページではマルクスは「kapitalistische」〔capitalistische ではなくて〕、等々と書いている。(〔 〕は筆者の挿入)

わたくしが「第2部第4稿とその前に書かれた断稿」という節で書いたのは、前掲拙稿の「付論 第2部第4稿とその断稿について」に記した、モスクワで生じたものと推定されるフォトコピーの入れ替えとそれにもとづく考証の誤りについてであった。この件については、わたくしの判断が正しかったことが認められたわけである。

あとの論点については、ここで詳しく論じるのは不適當なので、いくつかのことだけを個条書きにしておく。

- ① わたくしの考証には、第1稿での叙述の分析による論拠をあげてあるが、この返書はその内容の当否にほとんど触れていない。
- ② 第2部を3章にわかつという構想が第1稿のはじめからあったことが強調されているが、その点にはなんの異論もないのであって、問題は、プランに「第3章」としか書かれていないことをどうみるか、という点にある。4筆者の主張は、これはプランの「未成熟」を示すものだということであるが、わたくしの主張は、第1稿の末尾にすでに第3章のプランを書いたのでそれを繰り返さなかったと考えられるのであって、内部のプランがかたまっていなかったから「第3章」としか書かなかった、と単純に見ることはできない、ということである。
- ③ 3循環形態がすでに両草稿で述べられていることはそのとおりだが、その成熟度が問題であって、とくに「商品資本」のような概念がどの程度仕上げられているかをみるならば、まさにこの第1稿の執筆中にそれが行なわれたことが確認されるはずである。
- ④ 第1章の表題の変遷を追って確認できるのは、プランでの表題と第4稿断稿での表題と第4稿での最初の表題とが等しい、という事実であり、これはプランと第4稿との関連の程度をよく示しているのである。このことにたいして、動揺そのものは草稿の執筆順序を証明しない、というのは、反論になっていない。
- ⑤ 綴り法については、それぞれの草稿の未定稿的性格の程度が考慮されなければならない。そのうえで、プラン（たとえば Cirkulation）

16 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

→第1稿(たとえば Circulation)→第4稿(たとえば Cirkulation)
という変化が自然か、第1稿→プラン→第4稿が自然か、という
ことが考えられるべきである。

⑥ ただ、プランの上に——太い鉛筆で——「I)」とノート番号が書か
れていることをどう考えるか、という問題はたしかに残る。マルクス
がプランを第1稿に属するものとしたのはそのとおりであろう。しか
し、このことが、プランが先に書かれたことを証明することになるわ
けではないであろう。プランをあとから書きつけて第1稿と一緒にし
ておいたものを、さらにあとから全体として第1稿とした、というこ
とが十分に考えられるからである。

以上のような理由から、4人の返書は拙論にたいする十分な反論になっ
ているとは考えられない。しかし、拙論は、近く刊行される“*International Review of Social History*”, Vol. XXVII-1983-Part I (IISG, Am-
sterdam) に „*Zur Datierung der Arbeit von Karl Marx am II. und*
III. Buches des Kapital“ という題で掲載されるので、おそらくはそれ
にたいして、もっと詳細な反論がいずれ発表されるのではないかと思われ
る。そのさいに、論拠をよく読んで考え直してみたいと考えている。

2. 草稿第5章の執筆時期

この第5章が書かれた時期については、すでに佐藤金三郎氏が、「1865
年8月1日から同10月中旬ごろまでの間に書きあげられたことはほぼ確実
である」¹⁾ という考証を行なわれていて、これはほとんど動かしがたいも
のと考えられる。

とくに、この章を書き終えた時点については、草稿そのもののなかに直
接の手がかりがあって、疑問の余地を残さない。それは、第5章の最後の
ページである404ページに残されたイングランド銀行週報からの引用とそ
れに付されたマルクスの言葉であって、エンゲルス版には採り入れられて

いない。佐藤氏はその訳文を掲げられているので、ここでは原文のまま引用しておこう。

Jetzt (October 1865) Operation d. Bank (Zinserhöhungen) wegen internal drain.

D. Zinsfuß 7% (11 Oct. 1865) bei folgendem State d. B. o. E. (11 Oct. genommen, weil Publication d. Bank status an diesem Tag []):

<u>Notes Issued</u> :	26, 606, 340.
<u>Reserve in Bank. Dep.</u>	[-] 4, 292, 145
<u>Also Notes in Circulat.</u>	22, 312, 195.
<u>Gold Coin u. Bullion (Issue Department):</u>	11, 956, 340
<u>Reserve in B. Dep.</u>	[+] 780, 006
<u>Total of Bullion</u>	12, 736, 346.
<u>Reserve d. Bank. Dep. Notes :</u>	4, 294, 145
	Bullion. [+] 780, 006
<u>Total Reserve=</u>	5, 074, 151.
<u>Private Securites (Bills etc.)</u>	£. 24, 086, 476
<u>Deposits</u> —Public.	£. 7, 228, 737.
Private	[+] 13, 506, 498
<u>Total</u>	20, 735, 235.

Exchanges günstig.

Ende September avancirt bank d. Rate of Discount v. 4 auf 4½ %. Anfang October auf 5 %, einige Tage später zu 6 % u. am 7 Oct. zu 7 %. (*Ms. I, S. 404*)

みられるように、マルクスは「いま (1865年10月)」と書いたうえで、「利子率が7%のとき (1865年10月11日) イングランド銀行の状態は次のようになっていた」として、同行の勘定をあげているが、ここで「10月11日」とした理由について、「10月11日としたのは、銀行の状態が発表されたのがこの日だったからだ」と書いている。最後の部分でマルクスが書いているように、イングランド銀行の割引率は10月2日に5%, 5日に6%,

18 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

そして7日に7%に引き上げられたのであった(ちなみに、11月23日にはいったん6%に引き下げられた)²⁾。7%に引き上げられたのが10月7日であったのにマルクスがわざわざ「10月11日」と書いたのは、この7日以降発表された最初の週報がこの日付のものだったからである。したがって、マルクスがこの個所を書いたのは10月11日以降でしかありえない。他方、マルクスは「いま」どうなっているかを記しているのであって、イングラント銀行の最新の週報を利用していたこともほとんど確かである。そこで、この個所は、10月11日付の週報の次の週報が発表された10月18日よりもまえに書かれたものだということになる³⁾。こうして、草稿404ページの記述から、第5章が完了したのは1865年10月中旬(11日—18日)であることが確認されるのである。

さて、これにたいして、第5章を書きはじめた時点については、マルクスの1865年7月31日付エンゲルスあての手紙によって間接的に推定することができるだけである。この手紙のなかでマルクスは、「さてぼくの仕事のことだが、これについては本当のことを打ち明けよう。理論的な部分(はじめの3部)を完成するためには、まだ3つの章を書かなければならないのだ⁴⁾と伝えている。ここでいう「3つの章」がなにをさしているのかについて佐藤氏は、三宅義夫氏の「現行第3部の第5～7篇のこと」⁵⁾という推定を支持されて、第1稿の「第5—第7章のことと考えてよいであろう⁶⁾とされている。つまり、1865年7月31日の時点にはまだ第5篇は書かれていなかった、したがって、第5篇はこの日以降に書き始められた、ということである。結論的にはこの推定は動かしがたいと考えられるが、しかし「3つの章」が「第5—第7章」のことであるかどうかには、多少の疑問の余地がある。というのは、すでに述べたように、第4章に商業資本、第5章に利子生み資本をあてるという最終決定は第4章の執筆中になされたものだった。これに続く章が、「超過利潤の地代への転化」と「収入とその源泉」という2つの章となることが確定していたとしても、この「3つの章」が、第4章(商業資本、利子生み資本)、第5章(地代)、

第6章（収入）の3章であるのか、第5章（利子生み資本）、第6章（地代）、第7章（収入）の3章であるのか、ということについては、一義的な判断を許す材料が見当たらないからである。だから、この点については確定的なことはまだ言えないとすべきであろう。だが、それにもかかわらず、「3つの章」が上の2つの3章のうちのどちらをさすにせよ、そのなかに利子生み資本を論じる章がはいっていることは確かである。もし、「3つの章」が前者の3章であれば、この7月31日以降に第4章を書き始めたということになり、後者の3章であれば、それ以降に第5章を書き始めたということになる。いずれにせよ、利子生み資本についてはこの日以降に書き始められたと推定することができる⁷⁾。

この推定を側面から補強するのが、佐藤氏もあげている、マルクスの1865年8月19日付エンゲルスあての手紙である。マルクスはその追伸部分で次のように書いている。

「銀行制度等々に関する1857年と1858年との議会報告書をぼくは最近また調べてみなければならなかったが、このなかに見いだされるまったくのナンセンスは、君にもとうてい想像できないようなものだ。重金主義でそうだったのと同様に、資本イコール金なのだ。さらにその間に、A. スミスへの恥知らずな回想や、貨幣市場^{マネ・マーケット}のたわごとを彼の「啓蒙された」見解と和解させようとする、身の毛のよだつような試みがいってくる。なかでも一頭地を抜いているのは、今やついに土に帰ったマカラク〔1864年死〕だ。こいつは明らかにオーヴァストウン卿から多額の心づけをもらっていたのだ。だからまた、オーヴァストウンは「卓越した最大の銀行家」であって、なにがなんでも弁護されなければならないというわけだ。このごった煮の全部にたいする批判は、ぼくはもっとあとの本〔eine spätere Schrift〕ではじめてすることができる。」（MEW, Bd. 31, S. 145.）

ここでは、みられるように、この手紙を書いた8月19日よりもまえから、1957年と1958年の『銀行法委員会報告書』を読み返していることがわ

20 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

かる。これは第3部では第5章、そしてそのなかでもとくに信用制度にかかわる部分のための作業であることはいうまでもない。したがって、さきの7月31日からこの8月19日までのあいだに利子生み資本を取扱う章に手をつけたのだらう、と推定されるのである。なお、上の引用の末尾で、「このごった煮の全部にたいする批判」は「もっとあとの本」で——したがって『資本論』第3部以外で——はじめてできる、と書いている点は注目しておく必要があるらう。

以上の3つの資料から、第5章は「1865年8月1日から同10月中旬ごろまでの間に書き上げられた」と考えることができるわけである。

- 1) 佐藤, 前掲論文, (2), 107ページ。
- 2) Sir John Clapham: *The Bank of England—A History*. Vol. II, p. 430. 邦訳, J. クラバム『イングランド銀行—その歴史—』, II, 英国金融史研究会訳, ダイアモンド社, 1970年, 475ページ。
- 3) 佐藤氏は、さきに掲げた原文中、上から4行目にある、genommen を genau と読まれて、「10月11日現在」とされ、「マルクスが第5章を書き終えた日付は、まさに1865年10月11日であったということになるわけである」と書かれている。しかし、genau でなくて genommen であれば、むしろその当日よりもそのご何日か経ってからこう記したと見るほうが自然である。佐藤, 同前, 同ページ, 参照。
- 4) MEW, Bd. 31, S. 132.
- 5) 三宅義夫『マルクス信用論体系』, 日本評論社, 1970年, 16ページ。
- 6) 佐藤, 同前, 同ページ。
- 7) 前出の „Marx-Engels-Jahrbuch“ 第5号で発表された4人の共同論文の「結論」では、この点について次のように書かれている。

「第3に。マルクスが1865年7月31日に、「まだ3つの章を書かなければならない」と伝えたときに、この言葉で念頭に置いていたのは『資本論』の第3部の仕上げのことであった。第3部の仕事が当時まだ、時期的に前の方のプランによって行なわれていたならば、ここでマルクスが考えていたのは、おそらくは、地代についての章(第5章)、諸収入とそれらの源泉についての章(第6章)、それに貨幣の還流運動についての章(第7章)、の3章であろう。マルクスがこのときにすでに第3部の構成を変更する決心をしていた場合には、ここで言われていたのは貸付資本についての章(第5章)、地代につ

いての章（第6章）、それに諸収入とそれらの源泉についての章（第7章）、の3章ということになるだろう。資本と賃労働に関するむすびの部分について言えば、彼が当時すでに、その部分を諸収入とそれらの源泉についての章のなかに最終項目として置く意図をもっていただことは明らかである。」（Miskewitsch, Ternowski, Tschepurenko, Wygodski, *a. a. O.*, S. 317.）

ここで「時期的に前の方のプラン [der frühere Plan]」と言っているのは、この共同論文のはじめの方で並記されている2つの第3部プランのうちの一つをさしている。それは、1861—63年草稿のノート第18冊1139ページにある第3部 [Teil] のプラン、つまり従来『剰余価値学説史』の第1分冊の末尾に置かれてきた3プランのうち第3部プランである。「第3部の構成を変更する決心をした場合」というのは、それにたいして上述の2つのプランのうちのもう1つのプランの方をさすことになるだろう。このプランは次のようなものである。

『資本論』第3部のための推定プラン

第1章 剰余価値の利潤への転化

第2章 利潤の平均利潤への転化

第3章 資本主義的生産の進歩に伴う一般的利潤率の傾向的低下の法則

第4章 商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への、あるいは商人資本への転化。利子と産業利潤とへの利潤の分裂。利子生み資本。

第5章 超過利潤の地代への転化。

第6章 諸収入（諸所得とそれらの源泉）

第7章 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流諸運動

むすび 資本と賃労働」（*Ebenda*, S. 300—301.）

さて、以上の2プランを前提して上の「第3に」で述べられていることを見直すと、いくつかの疑問が湧いてくる。まず、「構成を変更」した場合を先に見ると、「むすび 賃労働と資本」は「諸収入」に吸収されたとして、第7章の「還流運動」はどうなったのか、という疑問が湧いてくる。ところがこの論文ではこの「還流運動」がいつどうなったかについてまったく触れられていないのである。第2に、第4章では商業資本と利子生み資本とが一緒になっているが、3つの章を数えるときには「貸付資本」として、商業資本がどこかに消えている、というよりも、この第4章がすでに2つの章に分けられたプランを想定しているのである。しかもなんの説明もなしに、である。論証なしの結論と言わざるをえない。

「時期的に前の方のプランによってマルクスが書いていた場合」については、そもそもそういう「場合」が考えられないことに4筆者は気づかなかった

22 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

ようである。もし、マルクスの「まだ3つの章を書かなければならない」という言がその通りであったとするならば、これが、地代、収入、還流運動、の3つではありえない。なぜなら、4人の共同稿でも他の個所(*Ebenda*, S. 309)で引証しているように、1865年の10月初旬までは第5章、すなわち利子生み資本にかかっていたのであって、マルクスが7月31日に利子生み資本の章をすでに済んだものとみなすとは考えられないからである。

結局、「3つの章」とは、(4)商業資本と利子生み資本、(5)地代、(6)収入、か、(5)利子生み資本、(6)地代、(7)収入、か、このどちらかでしかありえない、ということになるのである。

なお、このように考えられるとすれば、同時に、「貨幣の還流運動」について、マルクスがこの章を第3部から取り除くことを決めた時点について、1つの材料が得られることになる。すなわち、7月31日付のさきの手紙を書いたときには、すでに「還流運動」は第3部のなかの1章とされなくなっていた、ということであり、第3部の内容に即して言えば、少くとも第5章にはいるときには、あるいはもしかすると第4章にはいるときにはすでに「還流運動」は第3部の1章として予定されていなかった、ということである。他方、第3部第1稿の執筆中にそれを一時中断して書かれたとみられる第2部第1稿では、最後まで第3部の第7章に「還流運動」を置くことを前提していたのだから、この第2部第1稿から第3部にもどってからのさきの時点までのあいだに「還流運動」についてのプラン変更が行なわれたわけである。

3. エンゲルスの編集作業の経過

さて、マルクスの死後ほどなくしてエンゲルスはマルクスの遺稿のなかに『資本論』第2巻——第2部および第3部——の歴大な草稿を発見した。そして、1984年の6月頃から第2部の仕事にかかり、翌1985年1月はじめにはもう清書稿を仕上げることができた。ところが第3部の仕事は第2部とはくらべものにならないほど、多くの年月とエネルギーとを必要としたのであった。エンゲルスは、第2部の仕事を終えるとまもなく、1985年2月末には第3部の仕事にかかったが、その原稿の最後の部分を印刷所に入稿したのは1994年5月11日であった。じつに9年以上の年月を必要としたのである。病気やほかの仕事に妨げられたこともあったが、すでに「はじめに」に引用した第3部への序文のなかで彼自身が言っているよう

に、マルクスの第5章の草稿から第5篇をつくりあげるのにひどくてこずったことが、その大きな原因のひとつであった。ここで、エンゲルスが第5篇の作業にどのように苦勞したか、また彼はその過程でこの篇をどのような性質のものに見なしていたか、ということ、主として彼の手紙によって見ておくことにしよう。

『全集』に収録されている手紙のなかで、エンゲルスが第5篇についてはじめて触れるのは、1885年5月19日付ラファルグあての手紙においてである。「第3巻はその半分以上を口述筆記させましたが、2つの篇はまだかなりの面倒をかけるでしょう。そのうち銀行資本と信用とに関する篇はちょっと雑然としていて、私よりも強い人でもこれには困るでしょうが、どうにしかたがありません。今は地代のところに来ています。」(MEW, Bd. 36, S. 317.) ここで「2つの篇」と言っているのは、第5篇と第6篇のことである。この頃のエンゲルスの仕事は、第3部第1稿を口述筆記させて読めるものにする事だった。この作業はおそらく1885年の2月末に始まり、7月中旬にだいたい終わった。エンゲルスは、第5章の口述筆記を終えたところで、上のようにそれを「銀行資本と信用とに関する篇」と呼んだのである。

その後しばらくエンゲルスは、口述筆記をすませた草稿の写しを手許にもちながら、第3部の仕事にかかれなかった。そのあいだにもしばしば、「本来の編集作業」にはいる希望を表明しながら、なかなか実現できなかった。そんななかで、1885年11月13日にダニエリソンにあてて、次のように書いている。

「第3巻については、オリジナルから読みやすい原稿への最初の書き写しをもうすませました。その4分の3はそのままでほとんど公刊に堪えるものです。しかし、最後の4分の1、あるいはもしかすると3分の1は、多くの労働を必要とするでしょう。第1篇(剰余価値率と利潤率との関係)とそれからそのあとの方の信用に関する篇や部分的には地代に関する篇がそうです。それ以外にも、他のほとんどすべての篇の若

24 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

干の部分もそうなのです。」(MEW, Bd. 36, S. 385.)

ここでは第5章は「信用に関する篇」と呼ばれている。ここで示されているように、エンゲルスは第1篇、第5篇、第6篇の3つの篇を、まだ大きく手を加えなければならない状態にあると判断していた。1887年2月19日にも同じダニエルソンに、「第3巻には、たまってしまったいくつかの別の仕事をすませしてから、取り掛かります。3つの篇を除いて、大部分はほとんど印刷できるようになっています」(MEW, Bd. 36, S. 617)と書いている。

エンゲルスがじっさいに「本来の編集作業」にかかることができるようになったのは、1888年の10月であった。同年の12月下旬または翌1889年1月上旬には、困難が予想された第1篇を終え、その後順調に作業を進めて、2月10日には第4篇まで片づけた¹⁾。第5篇の作業にはいるところで、国際労働運動などでの仕事が多く、またしばらく間があくことになった。1889年7月4日にはダニエルソンに次のように伝えている。

「第3巻は、いろいろなやむをえない事情のために、この3か月のあいだは休止状態になっていました。そして夏はいつでも非常に怠惰な季節ですから、9月か10月以前にはあまり仕事ができないのではないかと気がかりです。銀行と信用とに関する篇はかなりの困難を呈しています。主要な原理は十分に明瞭に述べられていますが、全体のつながりは、たとえばトゥックやフラートンのような、この主題に関する文献のうちの主要著作を読者が熟知している、ということを前提しており、しかも一般にはそうでないのですから、多くの説明的な注などが必要になるでしょう。……最後の篇「地代について」は、私の記憶するかぎりでは、形式上の校訂を必要とするだけですから、銀行と信用の篇(これは全体の3分の1です)がすんでしまえば、最後の3分の1(地代とさまざまな収入の種類)は長くはかからないでしょう。」(MEW, Bd. 37, S. 243.)

じっさい、パリでの国際社会主義労働者大会に関連する文通や『資本

論』第1巻の第4版の準備などのために、エンゲルスが第5篇の仕事に戻れたのは11月初頭であった。しかしこのたびも、次々としなければならぬことがはいつてきて、長期にわたる作業の中断が繰り返された。1890年4月9日には、フェルディナント・ドメラ・ニューエンホイスにあてて次のように書いている。

「『資本論』の第3部は私の良心に重くのしかかっています。いくつかの部分は、厳密な校訂や部分的な編成替えをしなければ公刊できないような状態にあります。そしてそのようなことを私はこのような壮大な著作についてはよくよく考えたうえでなければ行なわない、ということはおわかりになるでしょう。まず第5篇を仕上げてしまえば、そのあとの2つの篇はそれよりも骨が折れないでしょう。最初の4つの篇は、最後の校閲さえすれば印刷できるようになっています。もしも私がまる1年当面の国際運動からまったく退き、新聞も読まなければ手紙も書かず、なにごとにも煩わされないでいることができるのならば、簡単に終わっているでしょうに。」(MEW, Bd. 37, S. 377.)

1891年にはいっても、なかなか本格的に仕事にかかることができなかった。3月以降、仕事に戻りたいという切実な気持ちをいくつもの手紙のなかで表明している。そのようななかで、1891年7月1日にはコンラート・シュミットに、第5章のマルクスの記述についてのエンゲルスの評価を示す、次のような忠告を書いている。

「信用制度と貨幣市場についてのあなたのお仕事は、『資本論』の第3巻が出るまでは未完のままにしておくのが最善でしょう。この巻のなかには、この題材に関するたくさんの新しいものと、さらにそれよりもはるかに多くの未解決なものが、つまりもろもろの新たな解決とならなくてもろもろの新たな課題が見いだされるのです。」(MEW, Bd. 38, S. 128.)

ここで注目されるのは、エンゲルスはシュミットが手に取るであろう出版された第3部——そしてもちろんその第5篇——について、「未解決な

26 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

もの、「課題」が多く見いだされるだろうとしている点である。エンゲルスはマルクスの第5章の草稿をそのようなものとして見ており、そして彼自身もそうした未解決の課題はそのまま第5篇に残すつもりでいたことがわかるのである。

このあと、同1891年11月からまた精力的に第5章に取りかかった。12月3日にはカウツキーに次のように書いた。

「君の10月30日付の手紙には長らく返事を怠っていたが、それは第3巻のせいで、ぼくは再びこれに精を出しているのだ。ぼくはいまちょうどいちばんむずかしい部分に来ている。つまり、貨幣資本、銀行、信用、等々に関する諸章(およそ6章から8章)だ。ここではぼくは、一度取りかかった以上は中断なしに仕事を続け、文献をもう一度よく調べ、要するに全体に精通しなければならない。そうすれば、ぼくは——おそらく——結局は大部分をそのままにしておくことががき、しかも積極的にも消極的にもへまはしなかったという確信ももてるわけだ。」
(MEW, Bd. 38, S. 233.)

ここで「貨幣資本、銀行、信用、等々に関する諸章」と言っているのは、第5篇の全体ではなくて、現行版の第25—35章にあたる部分、マルクスの草稿では第5章のうちの、後述する「5)信用。架空資本」の部分であろう。エンゲルスの第3部序文にあるように、「第21章から第24章まではだいたいでき上がっていた」(MEW, Bd. 25, S. 13)のであって、じっさいエンゲルス版でのこの部分はマルクスの草稿と基本的には一致しているのである。この第25—35章の部分について、ここでは「およそ6章から8章」における構想を示している。エンゲルス版での最終の区分は第25—35章と11章になっているのだから、この時点ではまだ章別編成も固まっていなかったわけである。エンゲルスがこの11章の区分をすでに決めているのではないかと思われるのは、1892年10月10日付クーゲルマンあての手紙で、「いま第3巻の第27章を仕上げたところです。第29—34章は最も困難な個所です」(MEW, Bd. 38, S. 491)としているところである。「35章」

ではなくて「34章」となっているのがやや気になるところであるが、構想がここではほぼ固まっていると見ることができるであろう。しかし、エンゲルスの作業はなかなか進まなかった。仕事の困難さに加えて、依然としてほかの仕事や用件での中断がしばしば生じていた。しかし、1893年2月24日にはさしもの第5篇も基本的に終わることになった。ここにいたるまでのエンゲルスの苦勞と心痛とは、次の若干の手紙のなかにはっきりと見ることができる。

「わかってもらえると思うが、ぼくは——できるだけ早くまた第3巻に着手して、それからは中断なしに終わりまで続けなければならないので——君の原稿にはざっとしか目を通すことができない……。」(1891年12月27日、カウツキーあて。MEW, Bd. 38, S. 241.)

「いまぼくは(1)『イギリスにおける労働者階級の状態』の重版の校正刷を読まなければならない。(2)『社会主義の発展』のエイヴリングの訳を校閲しなければならない。(3)なおいくつかの小さな仕事があって、それから(4)ふたたび第3巻に取り掛かるのだが、これはちょうど最も困難な章にぶつかっているところだ。だが、いっさいの間奏曲を断乎として拒否すればなんとかなるだろうと思う。そのあとでさらにすべきことには、おそらく、ただ形式上の困難があるだけだろう。」(1892年1月6日、ゾルゲあて。MEW, Bd. 38, S. 247.)

「ぼくは恐ろしくいろいろな仕事や雑用を背負いこんでいる。……そしてこのなかで第3巻を仕上げなければならない。いまいましいことだ。だが、これはやり遂げる。ただ、ぼくが通信を中断しても、どうか勘弁してくれたまえ。」(1892年3月5日、ゾルゲあて。MEW, Bd. 38, S. 289.)

「第3巻には信用や信用貨幣に関することがもちろんたくさん出てきますが、まさにこの篇こそ、私がいちばんこずっているところなのです。」(1892年9月12日、シュミットあて。MEW, Bd. 38, S. 457.)

「私はマルクスの『資本論』第3巻の仕事をしていて、空いた時間が

28 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

できればすべてそれにささげなければならないのです……。」(1892年10月18日、パスクァレ・マルティニエツティあて。MEW, Bd. 38, S. 495.)

「ぼくはいま『資本論』第3巻にかかっている。もしも過去4年のあいだにたった1度でも3か月の平穩をもつことができていたら、これはもうとっくにでき上がっていたろうに。だが1度としてそうはいかなかったのだ。今度は、いっさいの文通やその他の用事は最大限ほったらかして、無理やりにでも、使える時間をつくる。このまえいちばんむずかしい個所の仕事をしたときにすでにかなりうまく下準備をしておいたように思うし、これまでのところもかなりうまく進んでいる。たしかにいまはいちばんの困難に当面しているし、それがこの数年来ぼくの道をふさいできたのだが、しかしぼくは気持よく、そしてそのかぎりでは体力も弱らないで仕事をしているから、たぶん今度はなんとかなるだろう。」

(1892年10月23日、ヴィクトル・アードラーあて。MEW, Bd. 38, S. 502.)

「ぼくは『資本論』の第3巻に没頭しています。とにかく今度こそ片づけてしまわなければなりません。いまは、いちばん仕上げられていない、いちばん困難な部分をやっています。つまり、銀行、信用、等々です。この仕事はどうしても中断するわけにはいきません。中断したら、全体をもう一度始めからやり直さなければならなくなるでしょう。それだから文通も全部やめているわけで、あなたにもほんのわずかしか書けないのです。」(1892年11月3日、ボル・ラファエルグあて。MEW, Bd. 38, S. 504.)

「第3巻はうまく進んでおり、完成するまで中止しないつもりだ。それは文通をほったらかさないといけない。あなたへの手紙も短くなるが許してほしい。……さあこれからまた仕事だ！ この4—5年というものぼくの道をふさいできたこの銀行や信用に関する篇(というのは、絶対に自由な時間が最低3か月は無ければそれを仕上げることができないのに、この3か月が1度もみつけれなかったからだ)をぼくが了え

る日には、——ぼくがそれを了える日には、アルコールをいくらか消費することになるだろう——賭けてもいい！」(1892年11月4日、ラウラ・ラファルグあて。MEW, Bd. 38, S. 506.)

「ご無沙汰を許してほしい。この冬には第3巻を完成しなければならない。それはどうしても片づけなければならないし、そうするためにはぼくのいっさいの文通を脇に押しつけるほかはないのだ。3週間まえからこれに取り掛かっていて、これだけは君に言えるが、仕事は予想以上にうまく進んでいる。このまえ中断してしまったときによく下準備をしておいたので、それがいまむくわれているというわけだ。といってもまだ山ほどの仕事がある。だが、もう終わりが見えるところまではきた。そしてだれよりも喜んでいるのはこのぼくだ。この仕事は悪夢のようにぼくの良心のうえにのしかかっていたのだから。ぼくは無理やりに自由な時間——ほかのいっさいの仕事から完全に自由な時間が少なくとも4か月はなければそれはだめだ——をつくった。いまこれをやらないとまったくできなくなることがぼくにはわかっている。時代は不穏になり戦闘的になりつつあるからだ。」(1892年11月5日、ゾルゲあて。MEW, Bd. 38, S. 507.)

「ぼくはこのところずっとひたすら第3巻で辛苦してきたが、幸いにして成果がないわけではなかった。今日はもう、主要な困難——信用制度——はだいたい克服されて、あとにはただ技術的な編集作業——最もややこしい時間のかかる仕事——が残っているだけだ、と言うことができる。」(1892年11月6日、ペーベルあて。MEW, Bd. 38, S. 509.)

「いよいよ第3部を終えるときです。世紀の終わりはいよいよ多く充電されています。幸いにしてそれ(すなわち第3巻の仕事)はうまくはかどっているので、冬のあいだに終わるものと思います。最大の困難は克服されています。」(1892年11月22日、ポル・ラファルグあて。MEW, Bd. 38, S. 520.)

「第3巻の仕事は峠を越えた。最も困難な篇のなかのもろもろの困難

30 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

は克服されたのだ。しかし、最後の2つの篇をすませてしまうまでは、完成の時期についてははっきりしたことはなにも言えない。相変わらず個々の難点がでてきて、それに時間をとられるかもしれない。だが、陸地はもう見えている。いちばん厄介なところ、いちばん時間のかかるところは克服されている。今度は仕上げる。」(1892年12月22日、ペーベルあて。MEW, Bd. 38, S. 556.)

「……さっそく返事を書く。というのは、今日は日曜日で数分間のひまがあるが、明日はまた、銀行、信用、貨幣資本、利子率といったジャングルにとびこんで、『資本論』第3部の第30—36章の完結を急がなければならぬからだ。この第5篇は、ほんとうの困難に関するかぎりできでき上がったも同然だが、文章の点からみてそれに「最後のみがき」をかけるためには、まだ多くのことが必要だ。つまり語順を変えたり、繰り返しを削除したり、といったようなことだ。それは8—10日のうちにすませるだろう。それから第6篇と第7篇が続き、そのあとは——大団円だ。」(1893年2月12日、ラウラ・ラファルグあて。MEW, Bd. 39, S. 31.)

「私はいま——わずかの形式的なことを除いて——第5篇(銀行と信用)の編集を終えました。これは対象の状態から見ても手稿の状態から見ても全篇のなかで最も困難な篇なのです。あとには2つの篇——全体の3分の1——が残っているだけです。そのうちの1つ——地代——はやはり非常に困難な対象を取り扱っていますが、私の記憶するかぎりでは、その草稿は第5篇の草稿に比べればはるかによく仕上げられています。ですから、これまでどおり私は、予定の期間内に私の仕事を完了することができると思っています。大きな困難は、3—5か月のあいだいっさいのじゃまから完全に免れて、すべての時間を第5篇にささげるといことでした。そしてこれはいま幸いにすんだのです。」(1893年2月24日、ダニエルソンあて。MEW, Bd. 39, S. 36.)

「さて、ごく内々の話だが、第3巻はできあがったも同然だと言え

る。最も困難な篇、銀行と信用、は終わった。あとには2つの篇が残っているだけで、そのうちの1つ（地代）だけがいくらか形式上の困難をもたらすかもしれない。しかし、まだしのこされていることのすべては、これまでにしなければならなかったことに比べれば、まったくの児戯だ。いまではもう中断を恐れることはない。」（1893年3月14日、ラウラ・ラファエルグあて。MEW, Bd. 39, S. 48.）

「第3巻では7篇のうちの5篇が最終の——形式上の——編集だけを残してできあがっている。主要な困難だった信用篇は克服された。いまは地代にかかっている……。」（1893年3月20日、カウツキーあて。MEW, Bd. 39, S. 55.）

このようにして、第5章から第5篇をつくりあげる仕事は終わった。このあと約1年、エンゲルスは第6篇と第7篇とを仕上げたのち、全体に手を入れて完成原稿とする仕事に従事した。そして、1894年5月11日に最後の原稿を入稿し、第3部編集の仕事を終えた。

以上のような第5篇編集の作業についてエンゲルス自身が簡潔に語っているのが、彼の第3部序文のなかの、本稿の「はじめに」に引用した部分である。そこで述べられていることも考慮に入れながら、エンゲルスはマルクスの第5章の草稿の状態と内容をどのようなものとみていたかということをまとめておこう。

まず第1に、エンゲルスは第5章を、その部分部分によって程度の違いはあっても、全体としてきわめて未完成な状態のものとして見ていた。第3部序文では、「ここにはできあがった草稿がないばかりか、これから埋めていくはずの輪郭をもつような構想さえもなく、ただ仕上げに手をつけたものがあるだけであり、それも、一度ならず覚え書きや注意書きや抜き書きの形での材料やの乱雑な堆積に終わっている」と書いていた。要するに形式的にはまったく未完成だということである。またその叙述も、1889年7月4日付ダニエリソンあての手紙で言っているように、「主要な原理は十分に明瞭に述べられているが、全体のつながりは、主題に関する文献の

32 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

うちの主要著作を 読者が 熟知している、ということ を前提としている」、
といったもので、そのままでは一般の読者にはきわめて難解なものであら
ざるをえないと思われた。さらに、1891年7月1日のシュミットあての手
紙でみたように、第5章には「多くの未解決のもの」があり、読む者には
解決すべき「もろもろの新たな課題」を与えるのだ、とエンゲルスは考え
ていた。

このような草稿を第3部の他の諸篇とともに印刷に付することができる
ようにするエンゲルスの作業は、草稿で未解決の問題はそのまま読者に提
示するが、形式的には1つのまとまったものに仕上げ、一般の読者にも十
分理解できるものにしよう、ということであったであろう。そこで彼は、
「すきまを埋めることや暗示を与えているだけの断片を仕上げることでこ
の篇を完全なものにし、この篇が著者の与えようと意図してすべてを少く
とも近似的には提供する」(序文、前出)ことを3度も試みたが、結局う
まくいかなくて、「ある程度のところで仕事を切り上げ、現にあるものを
できるだけ整理することに限り、どうしても必要な補足だけをする」(同
前)ことに留まらざるをえなかったのであった。こうした経過からする
と、エンゲルスは途中で、彼自身の当初の目標であった、第5篇を1つの
まとまった完全なものにし、一般の読者にも読めるものにするという課題
を、なかば放棄したと言えるであろう。だから彼は、第3部序文でこの篇
について述べたところの最後の部分を、「このようにして、ようやく、な
んらかの意味で本題に関係のある著者の言説のすべてを本文に取り入れる
ことができた。抜き書きのうち、別の個所で述べたことをただ繰り返した
だけのものか、そうでなくても原稿のなかで詳しく述べていない点に触れ
ているわずかな部分のほかには、なにも脱落しているものはない」(MEW,
Bd. 25, S. 14)、と締めくくることが満足したのである。

ところで第2に、エンゲルスはこのような状態の草稿で論じられている
主題をどのように見ていたのか。エンゲルスはこの第5篇の表題を、「利
子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本」とした。これは、草稿

の第5章の表題である「利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」をそのまま生かしたものであろう。しかしながら、彼はこの第5篇で論じられている主題を、じっさいには次のようなものと考えていたようである。

「……この部分は第21ボーゲンで終わりますが、このボーゲンのなかで第5篇が始まっています。すなわち、利子と「企業者利得」とへの利潤の分裂、貨幣資本一般、銀行と信用、です。この篇はこの本のまる3分の1を占めています。この篇には他のどの篇よりも骨を折られました。」(MEW, Bd. 39, S. 252.)

これは、第3部の原稿のすべてを印刷所に入れたのち、1894年6月1日にダニエルソンにあてて書いているものである。ここでエンゲルスは、「利子と「企業者利得」とへの利潤の分裂、貨幣資本一般」と「銀行と信用」との2つの内容をあげている。そしてそれらはおそらく、それぞれ第21—24章と第25章以下（厳密には第25—35章）に対応するものと考えられていたのであろう。このことは、上の手紙よりさき、同年の1月9日ごろ執筆されたとされる、2つの、第3巻の紹介文からも見ることができる。

「この第3部で、利潤率一般の諸法則のほかには研究されるものは、商業資本、利子生み資本、信用と銀行、地代と土地所有、という諸対象である。」(MEW, Bd. 22, S. 436.)

「……商業利潤の分岐；貸付資本の介入および利子と企業者利得とへの利潤の分裂；貸付資本を基礎として築かれる信用制度とその主要な担い手である銀行、この制度のいかさまの花である取引所；……」(MEW, Bd. 22, S. 437.) (セミコロンに注目されたい。)

前者では、「利子生み資本」と「信用と銀行」の2つに、後者では、「貸付資本の介入および利子と企業者利得とへの利潤の分裂」と「貸付資本を基礎として築かれる信用制度とその主要な担い手である銀行、この制度のいかさまの花である取引所」との2つに、第5篇の内容が要約されている。別々の2つの新聞にPRのための紹介を載せるためにわざと表現を違

34 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

えて書いたにちがいないこの2つの文章は、しかしその内容においては基本的に一致している。すでにみたエンゲルスの手紙のなかでも、第25章以下について「貨幣資本、銀行、信用、等々に関する諸章」(1891年12月3日)と言い、あるいは第30章のあたりについて「銀行、信用、貨幣資本、利子率といったジャングル」と言っていた。

だが、他方でエンゲルスは、すでに見たように非常に多くの手紙のなかで、第21—24章をも含む第5篇の全体を、「信用篇」、「信用に関する篇」、「信用制度」、「銀行と信用」、「銀行と信用の篇」、「銀行と信用に関する篇」、「銀行資本と信用に関する篇」、というように呼んでいるのである。これは、ひとつにはこの篇の「最大の困難」が「銀行と信用」についての第25章以降にあるのでこの篇の「困難」について語るときには大きく「銀行と信用」と特徴づけた、という解釈もできるだろうが、しかしより基本的には、エンゲルスが、第5篇では第21—24章での展開を基礎として「銀行と信用」が論じられている、後者が中心のテーマだ、と考えていたことによるのではないかと思われる。

エンゲルスのこのような第5章の内容についての把握は、当然、彼が第5篇、とくにその第25—35章を編集するさいにさまざまなかたちで影響を与えたにちがいない。

たとえば、「はじめに」でも指摘した、第25章冒頭のパラグラフでのエンゲルスの加筆、すなわちマルクスの原文である、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある」、のなかの「分析」を「詳しい分析」に変えたことも、彼のそのような第5篇把握から来たものであろう。

それでは、エンゲルスのこのような第5篇の性格把握は、彼がマルクスの草稿を読んで独自にもつことになったものであろうか。この点については推測の域を出ないのであるが、それはむしろエンゲルスが生前のマルクスから与えられていた第3部についての情報の正確な反映ではなかったか、と思われるのである。われわれはそれを彼らの往復書簡によってみる

ほかはないのであるが、一般的に言えば、マルクスはエンゲルスにも『資本論』第2巻——第2部および第3部——の内容と進行状況についてあまり多くのことを伝えなかったようである。そのなかで、1868年4月30日にマルクスがエンゲルスに書き送った第3部のプランと内容についての説明は、おそらくエンゲルスにとっても第3部の編集作業の全体を通じて重要な意味をもっていたにちがいない。そのなかでマルクスは第5章について、次のように書いていた。

「V. いまや利潤は、それが実際に与えられたものとして現われる形態に、われわれの前提によれば16%に帰着させられている。そこで今度は、この利潤の企業利得と利子とへの分裂。利子生み資本。信用制度。」(MEW, Bd. 32, S. 74.)

マルクス自身が——ただし、第1稿を書き終えたのちに——第5章の内容として「信用制度」をあげているのであって、たとえばさきに見たエンゲルスの2つの紹介文はまさにこれと一致しているのである。また、第5章の全体をエンゲルスが「銀行と信用の篇」、「信用篇」などと呼んだことについては、マルクス自身がエンゲルスに次のように書いていたことが参照されるべきであろう。

「だから苦役はできるだけ早く始まらなければならない。というのは、ことに信用と土地所有²⁾とに関する諸章のためには、原稿作成以来多くの新材料が提供されているからだ。」(1867年5月7日。MEW, Bd. 31, S. 296.)

「第2巻は大部分があまりにも理論的なので、信用に関する章を利用していかさまや商業道徳の事実上の摘発をやるつもりだ。」(1868年11月14日。MEW, Bd. 32, S. 204.)

ここで「信用に関する章」と言っているのは、実質的には第25章以降にあたる部分が考えられていたとしても、形式的には第5章のことだとみることができよう。だとすると、これもさきのエンゲルスの、第5篇全体の呼び名としての「信用篇」、等々と同じだということになるだろう。

ただ、第5章についてのこのような特徴づけが、第5章に手をつけるまえにすでにマルクスのなかにあったものかどうかということになると、きわめて疑わしいと言わなければならない。第5章の執筆にかかった1865年8月以前には、マルクスの書き残したもののなかに、この種の表現をまったく見つけることができない。第5章の表題にも、いったん書いたのち消された第4章の表題のなかの利子にかかわる部分にも、「信用制度」という言葉ははいっていないのは、たんなる省略とか欠落といったものとはちがう、それなりの理由があるように思われるのである。この点については、行論の12. で立ち返る。

- 1) 1889年2月11日付、ラウラ・ラファエルグあての手紙(MEW, Bd. 37, S. 151), 参照。
- 2) 「信用と土地所有」は Kredit- und Grundeigentum (直訳すれば「信用所有と土地所有」)となっているが、Kredit- はもちろん Kredit の誤記であろう。

4. エンゲルスの編集作業の内容

第3部第1稿と第3部の現行版(エンゲルス版)とを対比してみると、エンゲルスが行なった作業の内容、あるいは彼がマルクスの草稿に行なった手入れの態容は、エンゲルスの第3部序文からわれわれが想像できるような程度をはるかに越えている。ここでは、彼の手が加わった結果生じた、草稿と現行版との違いのうち、第3部(広くは第2部も含めて考えることもできる)全体、また第3部第5章全体にかかわるいくつかの点を紹介しておくことにしよう。

まず、マルクスの草稿で下線、またはときとして二重下線によって強調されている個所と、エンゲルス版で強調されている個所とはかなり異なっていることを指摘しなければならない。エンゲルスが第2部および第3部の印刷用原稿を仕上げるさい、出版者から——印刷コストを押えるために——隔字体やイタリックによる強調を極力少くするよう要求されていたのかもしれないが、全体としてエンゲルス版での強調個所は草稿でのそれに

くらべて著しく少い。マルクスは、さまざまな観点からさまざまな気持を込めていたところで随意に下線をつけたのにならして、エンゲルスは、ここぞという、前後関係でぜひ浮き立たせる必要があると考えられたところだけを強調するように努力したように見える。その結果、エンゲルスの強調が草稿のそれと一致している場合ももちろんあるけれども、そうでないところが非常に多いということになっている。したがって、端的に言えば、エンゲルス版での強調と草稿での強調とはそれぞれ独自の観点からなされた別個のものである、ということになるであろう。そこで、草稿では下線がどこにつけられているかということが、マルクスの思想の展開を知るうえで重要な意味をもつことになるわけである。とりわけ、諸文献からの引用文が列挙されているだけの個所では、マルクスがどういう意味でそれぞれの部分を引用したのかということを知る手がかりとして、下線はきわめて重要な意味をもつものと考えられる。

エンゲルス版が草稿の状態をほとんど反映していない点としてあげておく必要があるのは、マルクスの草稿の多くの個所にみられる角括弧である。マルクスは、なんらかの意味で前後の記述と区別したほうがいいと感じた個所は、前後に角括弧をつけるのが常であった。それには、パーレンをつけるのとほとんど変わらないような軽い意味でのものから、そこでの主題から離れたことを先取りして書くために前後からはっきりと独立させておこうとしてつけたものまで、さまざまなものがあると思われる。これらの角括弧を一律に残すことも、一部分を選ぶことも厄介だと考えられたのかもしれないが、エンゲルスはこれらの角括弧を、一部はパーレンに変えて残したが、大部分は簡単に取り除いてしまった。これによって、文章を読んでいくさいの煩しきは減じたかもしれないが、角括弧によって囲まれた部分をなんらかの意味でひとまとまりのものとして読んでみることも、そうした部分を飛ばして読んだ場合の文脈の流れをつかむこともできなくなっていることは確かであろう。草稿における角括弧を調べることで、これまでよくわからなかった前後関係がはっきりするところもあるよ

うに思われる。

エンゲルスはマルクスの文章にいたるところで手を入れている。最も数が多い手入れは、明らかな誤記の単純な訂正、文法的不一致の訂正、わかりやすくするための代名詞の名詞への変更、ドイツ語以外のことば——ほとんどが英語かフランス語——のドイツ語への置き換え、英語的語法(Anglizismus)の除去修正、不完全文章の改善、といった純技術的な——したがって文意にはほとんど影響をもたらさない——性質のものであって、この程度の手入れは、ほとんど軒並みと言ってよいほどである。さらに、マルクスの用語を——エンゲルスの語感からみて——より適切な綴りや別の語に変えたり、場合によっては特定の用語をかなり一貫して別の用語で置き換えたり(たとえば、「生産的」を「産業的」に)、冗語と感じられるものを削ったり、わかり易くするために語や句や節を補ったり、マルクスが「等々」ないし「云々」の意味で etc. としているところを、内容的に考えて文章に変えたり、また1つないしいくつかの文章をそっくり削ったり、逆に1つないしいくつかの文章を書き加えたりしているところもきわめて多数にのぼる。この場合には、前後関係や全体の文意には影響がなくても、個々の文を取ってみれば大きく変えられたと言うべきものもあるわけである。そしてこのような性質の手入れが、マルクスの文章を読み易くしたり、ときによってはマルクスの誤記や誤ったないし不十分な記述を訂正したりしていることはもちろんである。

しかし、エンゲルスがマルクスの文章を読み誤って不適切な修正を行なっているのではないと思われるところも散見される。なかには、草稿とエンゲルス版とでは意味がまったく逆になっているところもある。たとえば、現行版(MEW, Bd. 25)の507ページに次のような文章がある。

「再生産過程の全関連が信用に基づいているような生産体制では、突然信用が止まって現金払いしか通用しなくなれば、明らかに恐慌が、支払手段を求めてのすさまじい殺到が生じざるをえない。だからこそ、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌として見える

だけなのである。そしてじっさい、問題はただ、手形の貨幣への転換可能性だけである [Und in der Tat handelt es sich nur um die Konvertibilität der Wechsel in Geld]。しかし、これらの手形のうちの多数が現実の売買を表わしているのであって、この売買が社会的必要をはるかに越えて膨張することが結局は全恐慌の基礎になっているのである。しかしまたそれと並んで、これらの手形の夥しい量が単なるいかさま取引を表わしており、それが今では明るみに出て不渡りになるのである。……」

この部分はマルクスの草稿では次のようになっている。

「全過程が信用に基づいているところでは、ひとたび信用が止まって現金払いしか通用しなくなるやいなや、信用恐慌と支払手段の欠乏とが生じざるをえないということ、また、だからこそ全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌として一見見えざるをえないということ、これは自明なのである。しかし、実際には、問題は手形の貨幣への「転換可能性」だけではない [Aber in d. That handelt es sich nicht nur um d. „Convertibilität“ d. Wechsel in Geld]。これらの手形の夥しい量が単なるいかさま取引を表わしており、それが今では爆発して明るみに出るのである。……」(Ms. I, S. 345)

このなかで、原文を挿入した文章は nicht が取り去られて意味が逆になっていることが読み取られるであろう。ここではエンゲルスは、前後関係から意識的に nicht を削ったのではないかと思われる。これに対して次の例は、おそらくはエンゲルスの解説の誤りがそのままになっているものではないかと思われる。現行版 (MEW, Bd. 25) の509—510ページの次の箇所である。

「イギリスの経済学の著述家たち——そして1830年以来の言うに足りる経済学の文献はおもに通貨、信用、恐慌に関する文献に帰着する——に特徴的なのは次のことである。すなわち、彼らは、恐慌時に為替相場の転換にもかかわらず生じる貴金属の輸出を [der Export von Edel-

40 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

metall, trotz der Wendung der Wechselkurse, in Zeiten der Krise],
ただイギリスの立場だけから、純粋に1国的な現象として考察している
のであって、……。」

このなかで、原文を挿入した部分は草稿 (*Ms. I, S. 346*) では d. Export
v. bullion etc, kurz d. turning of the Exchanges in Zeiten d. Crise
となっている。つまりエンゲルス版で trotz となっているところは草稿で
は kurz となっているのである。kurz であればこの部分は、「地金の輸出
等々、要するに恐慌時の為替相場の転換を」となる。つまり、為替相場の
転換「にもかかわらず」(つまり相場は順調になったのに)地金が流出す
るというのではなくて、為替相場が転換して逆調となり地金が流出する
という事態をさしていることになる。「転換」の内容はまったく逆になって
しまっているが、これはエンゲルスが kurz を trotz と読み誤った結果生
じたものと考えられるのである¹⁾。

もうひとつ、やや複雑な事例をあげよう。現行版の第30章に次のような
文がある。

「だからこそ、いつでも事業は、まさに崩落の直前にこそ、ほとんど
過度にまで健全に見えるのである。その最良の証明を与えるのは、たと
えば1857年および1858年の [von 1857 und 1858] 『銀行法特別委員会
報告』であって、そこではすべての銀行重役や商人たち、要するにオー
ヴァストウン卿をはじめとするすべての換問された専門家が互いに事業
の繁栄と健全とを祝福しあったのである——1857年8月に恐慌が爆発し
たちょうど1か月前に。」(*MEW, Bd. 25, S. 501—502.*)

1857年の委員会の聴問ではたしかに「専門家たちが互いに事業の繁栄を祝
福しあった」のであるが、1858年の委員会は、1857年恐慌のあとに開かれ
たのであって、そこで「事業の繁栄を祝福」するはずがないのであって、
上の引用中の von 1857 und 1858 のうちの und 1858 はおかしいわけ
である。このことは、すでに三宅義夫氏が指摘されていた²⁾ のであるが、草
稿(344ページ)ではじっさい、und 1858 ははいっていない。つまりこれ

はエンゲルスの挿入だったのである。しかし、エンゲルスがこの挿入をしたのには彼なりの理由があったのではないかと思われる。というのは、草稿では上の引用部分の末尾に脚注がつけられていて、そこでは1858年の『報告』から、ケイリの報告の第11項のなかの、「事業は、昨年（1857年）の証人たちによって議論の余地なく健全なものと考えられた」という1節が引用されているからである。おそらくエンゲルスはこの注を省略するかわりに、「および1858年」を挿入してすませようとしたのであろう。その結果がおかしなことになってしまったのだと思われるのである。

第5章でのエンゲルスの作業は、もちろんマルクスの文章に手を入れる程度にとどまるものではなかった。彼自身が第3部の序文で書いているように、いろいろなところで、文やパラグラフを置き換えたり、削ったり、書き加えたりしている。カットされて使われなかった部分は、第5章全体の分量からみればわずかなものと言えるかもしれないが、しかし絶対的にはかなりのものである。別稿で見る予定の「混乱」と題された、『議会報告書』からの引用の部分を除いても、非常に大きな2つの統計のほか、わたくしのノート（1行約70字）で1100行を超えるだけのものが現行版には取り入れられていないか、あるいはまったく書き替えられている。このなかには引用文や統計もあるが、マルクス自身の文章も多数含まれているのである。

エンゲルスが彼の版に取り入れなかった理由は、それぞれの個所でさまざまであろう。彼が序文で書いているところからは、内容的に重複している部分が削られていることはわかるが、それ以外の理由で取り入れられなかったと思われるところも少なくない。文章の意味がよくわからなくて落としたところもあるようである。たとえば、現行版（MEW, Bd. 25）の440ページの10—15行はオーヴェストウンからの引用に挿入された短評であるが、その最後は、「割引はけっして、たんに事業拡張のための手段なのではない」という文で終わっている。しかしマルクスの草稿ではこのあとに、次の1文がある。

42 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

「彼が信用を与えるのが利潤をあげるためであるように、彼が貨幣の貸し手から利潤を受けるのは、彼の事業を継続するためである [As he gives credit in order to make a profit, he wants to take *profit* from the money lender in order to carry on his business]。」(Ms. I, S. 324.)

この文章はたしかにこのままでは、前後関係から考えてもよく理解できないところがある。「貨幣の貸し手から利潤を受ける」ということがなにを意味しているのかよくわからない。エンゲルスがこの文を削ったのはそのせいではないかと思われるのである。しかし、この部分は実際には、「貨幣の貸し手から信用を受ける」の誤記であること、つまり credit を profit と誤記したものであることは、この文そのものからも、また前後関係からも明らかである。この文は削られる必要がなかっただけでなく、むしろ残されることが望ましかったと言えるであろう。このような削除もみられるのである。

他方、「はじめに」でみたように、エンゲルスは彼の序文で、「変更や加筆が単に編集的な性質のものではない場合」や彼の「書き入れが単に形式的な性質のものでないかぎり」は、彼の手入れには彼のものであることを明記したと書いているのであるが、彼がとくに「かなりの書き入れをしななければならなかった」と書いている第33—35章について、草稿と現行版とを対比してみると、彼の手によることが明記されていない彼の「書き入れ」はかなりの量にのぼっていることがわかる。それはとくに、「第33章 信用制度のもとでの流通手段」で著しく、「関連をつけるために」エンゲルスが行なった「書き入れ」は、MEW版で110行を越えている。「第34章 通貨主義と1844年のイギリスの銀行立法」ではそれは60行を越え、「第35章 貴金属と為替相場」では約30行である。

以上のところから、われわれは、エンゲルスが彼の序文で書いているところからはほとんど読みとることができない、各種の、しかも内容にもかかわる相違が、マルクスの草稿と彼の仕上げた版とのあいだに存在するこ

とを確認しないわけにはいかない。したがってまた、現行版の個々の文章についても、叙述の流れについても、マルクスの原文とは異なっている可能性を十分に考慮しながら、マルクスの真意を読み取っていく必要が、この第5篇ではとくに大きい、ということになるのである。そして、マルクスの原文を知りうる場合には、現行版とそれとの異同をつねに見ておかなければならない、ということにもなるであろう。

- 1) 1語の解説のちがいで意味が逆になってしまう別の例としては *nie* と *nur* との場合をあげることができる。これについては、すぐあとに掲げる付論IIを参照されたい。
- 2) 三宅義夫『貨幣信用論研究』, 未来社, 1956年, 221ページ。

付論 II *nie* と *nur*—第2部注32のなかの一文にも触れて—

マルクスの筆跡のなかで *nie* と *nur* と *nun* との3つは、それ自体をみたのではとても区別できないように似ているので、解説のさいには細心の注意が必要である。*nur* と *nun* とはとりちがえても文章の意味にそう大きなちがいは生まれませんが、*nur* または *nun* を *nie* と読むと、また逆に読むと、意味は正反対になってしまうからである。第2部第1稿の次の個所はその1例である。

「個人的消費はしかし、再生産過程の必然的かつ内在的な契機であるが、消費と生産とはけっして同一ではないし、さらに個人的消費はけっして資本主義的生産様式の規定的かつ先導的な動機ではない。[*Obgleich aber d. indi. Consumption nothwendiges u. immanentes Moment d. Reproductionsprozesses, sind Consumion u. Production in keiner Weise identisch u. ist d. indi. Consumption nie d. bestimmende u. angehende Motiv d. capit. Produktionsweise.*]」（第2部第1稿145ページ。邦訳、前出、283—284ページ。傍点およびイタリックは引用者。なお、2つ目の *indi.* はあとから挿入されている。原文は草稿フォトコピーによる。）

44 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

本文中の *nie* は、モスクワの ML 研保有の解読文では、はじめ *nur* と読み、それを *nun* と訂正している。しかし、ここは内容からみて *nie* でなければならないことは明らかである。現に、ML 研によるロシア語訳 (K. Маркс и Ф. Энгельс, *Сочинения*, т. 49, Москва, 1974, стр. 489) では *nie* と読んでいる。モスクワでの解読は *nur*→*nun*→*nie* と変わったわけである。

また、第2部のエンゲルス版で第16章に見られる注32は、マルクスの第2部第2稿の118ページからとられたものであるが、いわゆる「内在的矛盾」を述べているとされてきた個所の一部に、エンゲルス版とモスクワの ML 研保有の草稿解読文とでは意味が逆になっている個所がある。

「なぜなら、生産の潜勢力は、ただ、それによって剰余価値が生産されうるばかりでなく実現もされうる、というかぎりでのみ充用されるのだからである。[weil d. Produktionspotenzen *nur* so weit anzuwenden, als dadurch nicht nur Mehrwerth producirt, sondern realisirt werden kann;]」(傍点およびイタリックは引用者。原文は草稿 fotocopy による。)

この部分はエンゲルス版では次のようになっている。

「なぜなら、生産の潜勢力は、それによってそれだけ多くの価値が、生産されうるばかりでなく実現もされうる、というようには、けっして充用されえないのだからである。[weil die Produktionspotenzen *nie* so weit angewandt werden können, daß dadurch mehr Wert nicht nur produziert, sondern realisiert werden kann;]」(*MEW*, Bd. 24, S. 318. 傍点およびイタリックは引用者。)

明らかに、前者では剰余価値の実現による生産の制約が語られているのに対して、後者では、「価値とそれに含まれている剰余価値とを度外視して生産力を絶対的に発展させる傾向」(*MEW*, Bd. 25, S. 259)、つまり「生産の無制限的な増加に向かって突進する生産方法」(*Ebenda*, S. 260)が語られている。

わたくしは社会史国際研究所で、草稿118ページのオリジナルをまえに、研究員のランカウ氏と nur か nie かを話し合った。ランカウ氏は、自分には nur にしか見えないが、どう読むかはあなたが判断することだ、と言っていた。この個所を倍率の高い拡大鏡で見て写しとり、他の個所の多くの nie および nur と比べてみたりもした。その結果、ここだけをとってみれば nur と読むほかはないだろうという判断に達した。しかし、前後関係から nie と読むべきだということになったときに、nie と読むことは絶対にできない、と主張することができるほど確実なものではない。

そこで文脈が問題になるが、ここでは上に引用した部分についてだけみると、エンゲルス版の nie so weit..., daß のつながりにはどうしても不自然なものが感じられる。nur と読んだ場合の nur so weit anzuwenden, als というのは、次の個所での nur so lange angewandt werden, als と同じ構文と考える方が自然である。

「労働者の消費能力は……一部は、労働者は資本家階級のために利潤をあげるように充用されるかぎりでしか充用されない、ということによって制限されている。[d. Consumtionsfähigkeit d. Arbeiter...theils dadurch beschränkt ist daß sie nur so lange angewandt werden als sie mit Profit f. d. Capitalistenklasse angewandt werden können.]」

(Ms. I, S. 344 ; MEW, Bd. 25, S. 501. 傍点およびイタリックは引用者。)

そうだとすると、ここでの nie はエンゲルスの解説の誤りということになるだろう。そして、上のようにここでは剰余価値の実現による生産の制約について述べられているとすれば、それこそまさに、「第3章 流過程および再生産過程の実体的諸条件」、すなわちのちの第3篇の問題なのだから、このあとの1句、「こうしたことどもの全部が、次の章ではじめて問題になることである」、という1句で言われていることの一部を成すことになるであろう。

5. 草稿第5章と現行版第5篇との対応

ここではまず、マルクスの草稿の第5章とエンゲルス版の第5篇との関係を大づかみにとらえるために、両者の対応を一覧表のかたちにとまとめて

第1表 第3部第1稿第5章とエンゲルス版第5篇との対応

第3部第1稿	エンゲルス版
第5章。利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本。[Fünftes Kapitel. Spaltung d. Profits in Zins u. Unternehmungsgewinn. (Indust. od. Comm. Profit). D. Zinstragende Capital.]	第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本 [Fünfter Abschnitt: Spaltung des Profits in Zins und Unternehmungsgewinn. Das zinstragende Kapital]
1) [表題なし] (<i>Ms. I</i> , S. 286-295)	第21章 利子生み資本 [Kap. 21: Das zinstragende Kapital] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 350-359)
2) 利潤の分裂。利率。利子の自然率。[2] Theilung d. Profits. Zinsfuß. D. natural rate of interest.] (<i>Ms. I</i> , S. 295-300)	第22章 利子の分割。利率。利率の「自然」率 [Kap. 22: Teilung des Profits. Zinsfuß. „Natürliche“ Rate des Zinsfußes] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 370-382)
4) [表題なし] (<i>Ms. I</i> , S. 300-312)	第23章 利子と企業者利得 [Kap. 23: Zins und Unternehmungsgewinn] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 383-403)
5) 利子生み資本における剰余価値および資本一般の外面化。[5] Veräußerlichung d. Mehrwerths u. d. Capitalverhältnisses überhaupt in d. Form d. Zinstragenden Capitals.](<i>Ms. I</i> , S. 312-316)	第24章 利子生み資本の形態における資本関係の外面化 [Kap. 24: Veräußerlichung des Kapitalverhältnisses in der Form des zinstragenden Kapitals] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 404-412)
5) 信用。架空資本。[5] Credit. Fictives Capital.](<i>Ms. I</i> , S. 317-392)	第25-35章 [Kap. 25-35] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 413-606)
6) 先ブルジョア的なもの。[6] Vorbürgerliches.](<i>Ms. I</i> , S. 393-404)	第36章 先資本主義的なもの [Kap. 36: Vorkapitalistisches] (<i>MEW</i> , Bd. 25, S. 607-626)

おこう（第1表）。ここにあげたもののすべてが、すでにリュベールの『資本論資料』または佐藤金三郎氏の『思想』所載の論文のなかで紹介されている¹⁾。

この表での対応関係は一見して明らかであろう。ただ、草稿第5章では「3）」とあるべきところが「4）」となっており、「4）」とあるべきところが「5）」となっている。これについては、佐藤金三郎氏の次の推定が正しいものと思われる。

（前者について）「この「4）」は「3）」の誤記ではないかと思われる。というのは、「主要原稿」の2) Theilung des Profits. etc. の節は295—300ページであるが、このなかでマルクスは1), 2), 3) の番号を書いていたからである。このうち1) は現行版373ページ（上から17行目）のI, また、2) は同じく374ページ（上から6行目）のIIに該当する。3) は現行版377ページに注69としてあげられているジェームズ・ステュアートからの引用文——「主要原稿」ではフランス語——〔の前〕に付されている。おそらくマルクスは、この3) に影響されて「4）」と誤記したのであろう。²⁾

（後者について）「この「5）」は「4）」の誤記であろう。たぶん、注(25)で述べた〔上に引用した〕「4）」の誤記に影響されてのことであろう。³⁾

草稿の最後の節にあたる「6)」は、佐藤氏によって「C)」と読まれている。しかしこれはほとんど確実に「6)」である。リュベールも「6)」と読んでいる。1970年秋の信用理論研究会大会での報告で佐藤氏は、ここをまず「C)」と読んだのち、「A)」および「B)」がそのまえないか探してみたが見つけることができなかった、という趣旨のことを言われていたので、おそらくは特別の根拠があって「C)」とされたのではなかったのであろう。これが「6)」であるかどうかは、第5章の構成を見るうえでわれわれがきわめて重要な手がかりをもちうるかどうかを左右するものであるので、この点にはいささかこだわらざるをえないのである。

48 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

さて、マルクスの第5章の構成が上記のようなものであったことがわかると、なによりもまず注目されるのは、エンゲルス版で第25—35章をなしている部分が草稿では1つの節をなしていること、しかもページ数から言えば他の節に比べて不釣合に大きい分量であるにもかかわらずそうなっているということである。これまでも、第5篇は第21—24章の部分と第25章以下、より正確には第25—35章の部分とに、「内容的に2つの部分に大別される点については、ローゼンベルグの『資本論注解』での指摘をまつまでもなく、まぎれもない事実である」⁴⁾と言われてきており、草稿でこのようになっていたことは意外ではないが、しかしそれでもなお、マルクスがこれほどまでに第25—35章相当部分を1体のものとして見ていたということは、彼がこの部分を書くときに第5章の内容をどのようなものと考えていたかということを考えるうえで示唆するところが大きいものと言うべきであろう。だが、この点については、この「5」⁵⁾の部分の冒頭に書かれていることその他をあわせ考えるべきだと思われるので、ここではこれだけにしよう。

もうひとつ注目されるのは、この「5」全体の表題が「信用。架空資本」となっていることである。エンゲルス版では、この「5」のごくはじめの部分をもとめた第25章の表題が「信用と架空資本」である。これまで、第25章の表題がこのようになっていることについて、第25章の内容と結びつけていろいろに解釈されてきたようである。しかし、マルクスの草稿の状態をすなおに見るかぎり、「信用。架空資本」という表題が、第25章にまとめられた部分にのみ、または主としてその部分にのみ関係する、とすることはできないであろう。やはり、エンゲルス版の第25—35章の全体の表題となっている、とみななければならない。だがそうだとすると、「信用」のほうはともかく——というのは、第25—35章でなんらかの意味で「信用」ないし「信用制度」が論じられている、という点についてはまず異論がないであろうから——、ここで「架空資本」という言葉でマルクスが考えていたのはどういうことだったのか、ということが問題

になってくる。それは、従来第25章の表題中の「架空資本」の意味がなによりも第25章での記述と内容から読み取られようとしてきたのと同様に、「5）」全体の記述と内容から読み取られなければならないであろう。この点についても、行論で立ち入ることにしよう。

ところで、本稿では以下、上の「5）」の部分を見ることにするので、ここではその他の節について簡単にふれておくことにしよう。

エンゲルスが第3部の序文で第5篇の個々の章の草稿の状態と編集作業について述べているところで、彼は、「第21章から第24章まではだいたい仕上げられていた」⁶⁾と言い、また『先資本主義的なもの』(第36章)は完全に仕上げられていた⁷⁾と言っている。じっさい、草稿の「5)」よりも前の部分はかなりよくまとまっていて、エンゲルスの編集作業も彼の言う技術的・形式的な性質のものが大部分だったと言っているように思われる。現行版に取り入れられなかった部分もエンゲルスの書き加えもわずかである。第21章のおわり近くで、マルクスが注としているものを本文と注とに振り分けた⁸⁾のを除いて、配列を変えるようなこともしていない。また、「第36章 先資本主義的なもの」にまとめられた「6)」も、じっさい英語やフランス語の部分が相対的に少ないなど、文章もよりよく仕上げられているように思われる。ただここでは、草稿の400—401ページの部分と402—404ページの部分とが入れ替えられている(前者は、MEW, Bd, 25, 623ページの下から13行目—626ページ末行となり、後者が617ページ22行目—623ページ下から14行目となった)。

なお、第36章に関連して言えば、第5篇が第21—24章と第25章以下との2つに大別される、と言うのも、第21—24章と第25—35章との2つに大別される、と言うのも、どちらも不正確ではないかと考える。第36章は、第1部にとって本源的蓄積の章が欠くべからざる1つの独自の構成部分をなし、第3部第20章がその第4篇の、第3部第47章が第6篇の、それぞれ欠くべからざる独自の構成部分をなしているのと同様に、第36章は第5篇の欠くべからざる独自の——他の部分とは性質を異にする——構成部分をな

50 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

しているのである。したがって、第5篇を大別するならば、第21—24章；第25—35章；第36章の3つに、草稿第5章について言うなら 1)—「5)……外面化」；「5) 信用。架空資本」；6) の3つになる、と言わなければならない。第36章にふれない第5篇の構成論議は、方法論的に言えば、第5篇の全体を見ていないということになるのではないかと思われるのである。

- 1) Cf. Rubel, *Matériaux*, p.1779—1780, 1781, 1783, 1787, 1788 et 1813. リュベールの記述はしばしば不正確であって、これらのページにあげられているものにも疑問が多いが、そのいちいちを記すことはしない。佐藤氏のものは、前出論文、(1), 130—132ページ、である。そのうち、最後の区分を「C)」とみるか「6)」とみるかについては本文で触れる。
- 2) 佐藤、前出論文、(1), 138ページ。
- 3) 同前、同ページ。
- 4) 浜野俊一郎「いわゆるプラン問題と利子つき資本・信用——三宅義夫『マルクス信用論体系』を中心とする展望——」、『経済学雑誌』、第67巻第2号、1972年、29ページ。
- 5) 厳密にいうと、草稿第5章には 5) が2つあるわけであるが、本稿では以後、「5)」と呼ぶときには、かならず後のほうの 5)、つまり「5) 信用。架空資本」の節を指すことにする。
- 6) *MEW*, Bd. 25, S. 13.
- 7) *Ebenda*, S. 14.
- 8) 草稿の294ページは、*MEW*版の366ページ7行目から369ページ23行目の *bestimmter* までにあたる。しかし、草稿では注にまた注がついていたりするので、エンゲルスはこれを整理しなければならなかった。現行版を使って草稿の状態を再現すると、次のようになる。——ページの上半部に書かれている本文は、366ページ7行目から20行目の「59」という注番号のあるところまでの部分に、367ページ12行目からのパラグラフが改行されずに続き、同21行目の——現行版で改行されていない——*Es gibt...*のところで改行されたのち、29行目の...*erzeugen*. まで続く——その間の改行は現行版どおり——が、このあと、368ページ22行目から369ページ23行目の *bestimmter* までが現行版どおり続いている。ページ下半部の注は次のようになっている。まず、366ページの20行目の注番号「59」のところに「a)」という注番号があって、これに対応する注「a)」が書かれている。それはこの20行目のすぐ次の *Der Preis...*からこのパラグラフの終り(24行目)までの部分と、現行版で注59に収められている部分とで、後者のはじめところは改行されてい

る。その末尾にはc)という注番号がつけられ、「下に」と書いてある。この次には、367ページ29行目の...erzeugen. のあとにつけられた関連記号「++」に対応する部分で、はじめに「++」があって、以下同29行目のDer Wert...から368ページの21行目までの部分が書かれている。つまりこれは本文にあとから追加された部分である。なお、368ページ9-10行目のところは改行されていない。このあとに、上記の注番号c)に対応する注「c)」が来る。これは366ページ25行目-367ページ11行目のパラグラフに、改行して、注60に取められているものを加えたものである。なお、文章には多くの変更が加えられている。

6. 第5章の5)と現行版との対応

そこで今度は、第5章の「5) 信用。架空資本」の部分について見ることにしよう。この部分は前掲の第1表にみられたように第1稿の317ページから392ページにわたる大部のもので、ここからエンゲルスは第25-35章をつくったのであった。

まず、全体を展望できるように、草稿とエンゲルス版との対応関係を示す一覧表(第2表)をかかげておこう。

このなかで、「草稿の内容」としているのは、下線をつけた部分を除いて、すべて筆者が要約したものである。念のために下線の部分を取り出すと、次のようになる。

イングランド銀行の割引率。地金。銀行券。(325 a ページ。統計の見出し。)

I) (328ページ。)

II) (335ページ。)

III) (340ページ。)

混乱 [D. Confusion.] (352 a ページ。)

地金の輸出入。(365ページ。統計の見出し。)

ごく小さい部分にのみかかわる小見出しを除いて、これ以外には第5章5)には見出しなしの区分番号の類いは存在しない。

52 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

第2表 草稿第5章5)とエンゲルス版第5篇第25—35章との対応

草稿ページ	草稿の内容	エンゲルス版の区分と表題
317 318 } 注 319 } *320 } *321 } *322 } *323 } *324 } *325 } *325 a } *325 b }	<p>一本文</p> <p>信用制度の2つの側面とそれ ぞれの基礎。貸付可能貨幣 資本の源泉。貸付の諸形 態。銀行業者が取扱う信用</p> <p>一雑録</p> <p>(挿論) 通貨学派の「論理」とその混乱</p> <p>「イングランド銀行の割引率、地金、 銀行券」(統計)</p>	<p>第25章 信用と架空資本</p> <p>→ 352 b から。</p> <p>→ 361, 369, 370 から。</p>
326 327 } 328 } 329 } 330 } 331 } 332 } 333 } 334 }	<p>資本主義的生産様式の発展における信用 制度の役割</p> <p>I) 銀行学派による通貨と資本との区別 の批判</p>	<p>第27章 資本主義的生 産における信用の役割</p> <p>第28章 流通手段と資 本。トックとフラ ートンとの見解</p> <p>→ 335 から。</p> <p>→ 385 から。</p>
335 336 337 } 338 } 339 }	<p>II) 銀行業者の貨幣資本<small>フィクティヴ</small>の大部分は純粋 に架空なものである</p>	<p>第29章 銀行資本の成分</p> <p>→ 「欠番」から。</p>
340 (欠番) 341 342 } 343 } 344 } 345 } 346 } 347 }	<p>III) 貨幣資本<small>フィクティヴ</small>と現実資本<small>リアル</small>——両者の増減 (前者の蓄積、プレトラ、欠乏、後 者の蓄積、過剰、不足)のあいだの関連、 および、それらと国内の貨幣量との関 連</p>	<p>第30章 現実資本と貨幣 資本 I</p> <p>→ 347 から。</p> <p>第31章 現実資本と貨幣 資本 II (続き)</p>
*348 (統計あり) 349		

*350 (統計あり)		
351		
352		
*352 a	「混乱」——『銀行法委員会報告』1857年および『商業的窮境』1848年からの抜き書き	第32章 貨幣資本と現実資本Ⅲ (結び)
*352 b		
*352 c		
*352 d		
*352 e		
*352 f		
*352 g		
*352 h		
*352 i		
*352 j		
353	Ⅲ) の続き	第33章 信用制度のもとの流通手段 → ◦ 352 a, d, e, f, h, j から。 → ◦ 361, 362, 363, 364から。 → ◦ 369, 370, 371から。 → ◦ その他: 341, 348 ; 376, 377, 381, 382から。
354		
355		
356		
357		
358		
359		
360	『銀行法委員会報告』1857年からの抜き書き	
*361		
*362		
*363		
*364	『地金の輸出入』(統計とその分析)	第34章 通貨主義と1844年の銀行立法 → ◦ 352 b, c, d, f, g, h, i, j から。 → ◦ 360, 361, 364から。 → ◦ 370から。 → ◦ その他: 374から。
*365		
*366	『商業的窮境』1858年からの抜き書き	
*367		
*368		
*369		
*370	地金の蓄蔵と流出入。ブルジョアの体制における中央銀行の地金準備の意義	第35章 貴金属と替相場 第1節 金準備の運動
*371		
372	銀行券流通高、地金流入入、割引率などの関連と運動 地金の流出入は為替相場に直接影響するが、商品形態で	→ ◦ 352 f, i から。 → ◦ 381から。
373		
374		
375		
376		
377	『銀行法委員会報告』1857年から	
378		

54 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

379	の資本輸出入はそれに影響 しない 雑録——『銀行法委員会報告』1857年、 『エコノミスト』、その他の文献から の抜き書き	第2節 為替相場 → → ○ 352 b, c, e から。 → ○ 381, 382, 391から。
380		
*381		
*382		
383		
384		
385		
390		
391		
392		

エンゲルス版のほうに記入した、「→○352 b から」等々は、「草稿の352 b ページから取られた部分がある」等々の意味である。

この表では、左端に草稿のページを掲げておいた。ほぼ4ページごとに入れてある短い横線は、フォリオ版全紙の切れ目を示している。この第3部第1稿は、2つ折りにして4ページとなった全紙(フォリオ)をただ重ねただけのものであるが、そのそれぞれの全紙の切れ目である。この第5章5)では、325 a—325 b ページと352 a—352 b ページだけが、それぞれ2ページしかない全紙半切りであるが、この両者は既述のように同じ1枚の全紙を半分に分けてできたものである。325 a ページと325 b ページの上方面でのところには、「イングランド銀行の割引率。地金。銀行券」と題された統計が掲げられている。これは、1857年の『銀行法委員会報告』の付録の統計からつくられたもので、1844—1856年の各年について、公衆の手にある銀行券、銀行部の準備、地金、最低利子率、私的有価証券、私的預金、などの変動を記し、それにごくわずかのコメントをつけたものである。全紙半切りとなっているのは、統計を書くためにそうしたのではないかと考えられる。しかし、あとから挿入されたものでないことは、325 b ページの統計の下の余白に、明らかに325 ページに続く、『銀行法委員会報告』1857年からの引用が書かれていることから確認できる。他方、352 a—352 b ページは、やや独立的な352 a—352 j ページを書くときに、たまたま残されていた半切りをまず使ったのであろう。

マルクスはこの第3部第1稿でも、彼がいつもやるようなしかたで、各ページの上半部に本文、下半部に注ないしそれに準じるものを書いている。この上半部と下半部との境界は、あらかじめ各全紙を折って折り目をつけておくのである。第5章5)でも、基本的にはそうした紙の使い方をしている。このような使い方をしているところでは、上半部は各ページとも本文がぎっしりと書かれているのに、下半部は注が長いか短いかに応じて下部に広狭の空白ができる、といったことが生じることになる。ところがマルクスはときとして、まんなかの折り目をまったく無視して上から下までびっしりと書き続けている。上表のページ番号の左側にアスタリスク(*)をつけたページはそのように使われているのである。こういうページの部分は、一般的に言って、原稿というよりもノート風に使われている、ということが出来る。つまり、あとで原稿を書くさいの材料を書きつける、といった性格が強いのである。この5)についてみると、まず352 a—352 j ページと361—364, 369—371ページとを見られたい。どちらも『議会報告書』からの抜き書きであり、ノートの部分である。また、大きな統計を書くときには上半下半への2分という原則は守れないのであって、ここでも325 a, 348, 350, 365—368ページがそれにあたる。381—391ページは、さまざまな文献からの雑録であって、ここでははじめの2ページ——381, 382ページ——がページいっぱい書かれているが、それ以降は上半部だけが使われている(なお、386—389ページはページ番号が飛ばされて存在せず、392ページは、「銀行券とその兌換性」と書いてあるだけ——その下に「外国為替」と書いたのち抹消している——で、その下は空白になっている)。

さて、上半下半の区別なくページを使っているのが以上のようなものであるとすると、320—325 および 325 b ページもそのように使われていることをどのように見るかが問題になる。というのは、この部分からエンゲルスは第26章をつくったのであって、エンゲルス版では第25章や第27章といわばまったく対等の位置を占めることになっているが、草稿ではそういう

56 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

ものではないのではないかと、という疑問が生じるからである。この点は、第25章にあたる部分をどのように読むかということにも関係するので、節を改めてひとまずさきに考えておくことにしたい。

7. 現行版第26章の表題と性格

エンゲルス版の第26章の表題は「貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」である。管見によれば、これまでこの表題が第26章の内容に照応するものであるかどうか問題にされたことはないように思われるのであるが、草稿をみると、この点について根本的な疑問が生じざるをえない。

エンゲルスがこの表題をつけたのは、彼がこの章にまとめた321—325 b ページの冒頭、つまり321ページのいちばん上に、「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響 [Accumulation of moneyed Capital u. Einfluß derselben auf d. Zinsrate]」とあるからである。第26章はこのあと、325 a—325 b ページの統計の部分飛ばして、325 b ページの終わりまでを収めている。エンゲルスがこの表題をこの部分全体の表題とみたことは、ほとんどまちがいないと思われる。だが、この表題ははたしてそういうものであろうか。

エンゲルス版で見られるように、第26章はまず、『通貨理論論評』からの引用で始まり、続いてハッバード『通貨と国民』からの引用ののち、以下『商業的窮境』1847年からの引用が続く。そしてそのあと、『銀行法委員会報告』1857年によって、ノーマンとオーヴァストウンの混乱を批判しており、この部分が第26章の大半をなしている。第26章の主内容としてはこのノーマンとオーヴァストウンの批判の部分がふつう取り上げられているわけである。

まず、その主内容よりまえの部分までについて、その主題が「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」であるかどうかを、個々の引用で検討してみるならば、最初の『通貨理論論評』からの引用とハッバードからの引用を除いてそれ以降の引用は——貨幣資本の需給と利子率との結びつ

きに関連することを見いだせないわけではないにせよ——それとは異なった観点からの引用ではないか、という疑問が生じるはずである。というのもじつは当然のことで、——わたくしのみるところでは——この321ページと322ページの最初の1行は、318ページから続いているいわば雑録の部分の1部をなすものであって、さきの表題は、そのなかで『通貨理論論評』とハッバードとからの引用の部分につけられた小見出しにすぎないからである。マルクスは、抜き書きをするさい、しばしばその直前に抜き書きをするさいの視点ないし主題を記している。そしてそのような語句ないし文にはたいてい下線をつけている。さきの「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」もそうしたもののひとつなのである。

この雑録は、その全体をのちの「10. 第25章および第26章冒頭の草稿」のなかで訳出するので、それについて見られたい。エンゲルス版には取り入れられていないマルクスの下線も、『通貨理論論評』とハッバードとからの引用以外では、異なった観点から引かれていることを知られるであろう。

また、エンゲルスが取り入れなかった末尾部分の2つの引用群には、それぞれ「資本の価値 [Value of Capital]」および「通貨、貨幣、資本 [Circulation, Money, Capital]」という小見出しがつけられていて、これがさきの「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」と対等に並ぶものであることも確かめられるであろう。

以上のような判断が正しいとするならば、続くノーマンとオーヴァストウンの批判の部分についても、さきの表題が適切かどうか、内容的に再検討されなければならないことになる。そして、先入見を除いて第26章に取り入れられている記述を読むならば、ここでの批判の視角も、批判を通じてマルクスが明らかにしていることも、「貨幣資本の蓄積とそれが利子に及ぼす影響」という問題に限定されたものではないことを確認されるであろう。マルクスはここで、ノーマン、そしてとくに通貨学派の代表者たるオーヴァストウンの謬論、愚論を抜き書きしながら、そこに見られる、貨

幣資本と現実資本との意識的・無意識的な混同、資本と貨幣との混同、流通手段と支払手段との混同ないし無区別、そしてこれらのことから生じる、恐慌や銀行法や銀行経営のあり方についての愚論、さらにこれらの謬論がそれに基づいている銀行業者的立場、これらのことを根本的に突いているのである。その内容を短縮して表現するとすれば、他の諸章の表題となじむかどうかは別として、「通貨学派的「論理」とその混乱」ということにでもなるのではないかと考えられる。

さて、第26章の内容が以上のようなものだとする、その草稿である321—325b ページが上半下半の区別なく使われていることをどう考えたらよいのであろうか。わたくしは、それをあるがままに認める以外にない、と考える。すなわち、この部分は、下半に注の部分を用意しながら上半に本文として書かれた、というものではないということ、つまり、のちの利用のためにつくられた材料だということである。たしかにこの部分は、のちの、引用が大部分で系統的な叙述になっていない「混乱」の部分や360—364, 369—371 ページでの『議会報告書』からの抜き書きの部分とは異なり、引用を含みながらもマルクス自身の一貫した叙述が行なわれている。しかし、320—321ページ——後述のように、318—319ページでは、下半部に317—318ページのいわば「総論」への注が書かれているので、雑録はその上半部にある——でページの全面を埋めて書かれた雑録からとくに区切られることなく325b ページまで同じようにして書き続けられたこの部分は、このあとふたたび上半部のみ本文が書かれている第27章相当部分とは、やはり区別して取扱われるべきであろう。

もしこのように見ることが許されるとすれば、第5章のはじめのほうでこの章の本文として書かれているのは、317—318ページのいわば「総論」にあたる部分に続いては、第27章相当部分だということになる。エンゲルス版について大まかに言えば、第25章の本文部分末尾の、

「特殊な信用諸機関〔マルクスでは用具〕ならびに銀行そのもの〔マルクスでは「そのもの」はなし〕の特殊な諸形態は、われわれの目的の

ためにはこれ以上考察する必要はない」(MEW, Bd. 25, S. 417), ということに、「第27章 資本主義的生産における信用の役割」の部分が続く、ということである。草稿から読み取ることができるこのようにながりは、第5篇の各章の内的関連についての従来の上記の議論にも新たな視点を与えるものだと考えられるが、ここではそのことの指摘にとどめる。

なお、以上この項で述べたことになぜエンゲルスが配慮しなかったのかということであるが、卑見では、彼がまず草稿の全部を「読みやすい写しに書き取らせることから」¹⁾ 始め、そのあとでこの写しを使って「本来の編集」²⁾ を行なったという、その編集過程に原因があったのではないかとと思われる。最初の口述筆記のさいには、エンゲルスもまだ草稿の複雑な構成を十分につかんでいなかったであろうが、それにもかかわらず、前から順を追って筆記させていかなければならなかったであろう。そのさいのちょっとした思い込みが「写し」に定着してしまい、修正の機会を失することもあったのではなかろうかとも考えられるのである。すでに本稿の3で見たように、「写し」は1885年7月にはできあがっており、そのあと第1—4篇の編集をいちおう終えて第5篇、そしてとくに第25章以下にかかったのは1891年の秋以降であったようであるから、すでに「写し」を口述してから6年以上経っていた。もちろんエンゲルスは、「写し」だけでなく草稿そのものも手許において仕事を進めたのであろうが、「写し」によるものが大きかったのではないだろうか。第26章相当部分が各ページの上下を通して書かれていることに注意しなかった可能性はないだろうか。また、口述のさいに「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」という見だしを大きな部分の表題としてしまい、それが最後までそのまま残ってしまったということはないであろうか。

ともあれ、以上のような把握にもとづいて、さきの一覧表のなかで322—325 b ページの内容を、「(挿論) 通貨学派の「論理」とその混乱」とし、321ページは——現行第26章の1部を成しているにもかかわらず——「雑

60 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

録」に属するものとしたのである。なお、念のために一言すると、このことは、この「挿論」で論じられていることが第5章の範囲外であって、第5章から取り去ってもよい部分だ、ということの意味するものではない。マルクスの第5章の本論のつながりからみるとこの位置では「挿論」となっている、ということなのである。

1) *MEW*, Bd. 25, S. 11.

2) *Ebenda*.

8. 「架空資本」の意味

さて、順序が逆になったが、5)の最初の部分、エンゲルス版の第25章に取り入れられた部分について見ていくことにしよう。

第25章は、基本的には草稿の317—320ページから成っているが、若干の部分がそれ以外のところから取られているので、はじめにその部分をあげておく。

第1に、*MEW*版 423 ページ 6—13行(大月普及版 515 ページ17行目—516ページ4行目)の、エンゲルスが「I」という番号をつけている部分は、361ページから取られている。

第2に、エンゲルスが「IV」という番号をつけている*MEW*版 427 ページ19—25行(大月版 522 ページ13—16行目)はエンゲルスによる文章であり、それに続く同ページ20行目—428ページ17行目(大月版522ページ17行目—524ページ3行目)は370ページから取られている。

第3に、それに続く428ページ18—20行(大月版524ページ4—6行)はエンゲルスによる文章であり、それに続く同ページ21—25行(大月版同ページ7—9行)は369ページから取られている。

第4に、エンゲルスが「V」という番号をつけている同ページ26—31行(大月版同ページ10—13行)は352bページから取られており、それに続く3行はエンゲルスの文章である。

なお、420ページ以下のエンゲルスによる挿入文のなかで、421ページ24

—25行（大月版 513 ページ15—16行）で言及されている『商業的窮境』1848年の第1059号は草稿の352 j ページに引用されている。

さて、エンゲルス版では第25章は「信用と架空資本」という表題をもっている。この表題は、草稿の5)の表題「信用。架空資本」と無関係につけられたものだと考えにくい。したがって、エンゲルスは、マルクスの表題が5)の全体についてのものであると知りながら、なおあえてこの冒頭部分にこそこの表題がふさわしいと考えて「信用と架空資本」としたか、さもなければ、マルクスの表題をこの冒頭部分についてだけのものと誤認したか、そのどちらかであろう。後述するようにこの章では「架空資本」という言葉はリーサムからの引用に1か所でてくるだけであり、「架空資本」そのものが正面から論じられているのはエンゲルス版第29章であって、そのことを知りながらなおエンゲルスがこの表題を選んだ、という事情、また、さきにみたように第26章相当部分の最初に表題があると誤って考えたという事情、こうした事情を考えると、わたくしは、エンゲルスがマルクスの5)の表題をこの冒頭部分だけの表題と誤認した可能性が大きいと思う。そして、この誤認を前提にして、この表題にある「架空資本」の意味をこの5)の冒頭の部分、具体的には317—321ページのなかにも求め、その一定の解釈にもとづいて第25章をまとめたのではないだろうか、と思われるのである。

このことを明らかにするために、少し回り道ではあるが、マルクスはこの第5章のなかで「架空資本」という言葉をどのように使っているかということ調べておこう。

まず、第25章相当部分の317—320ページにでてくるただひとつの「架空資本」をあげよう。それは、草稿317ページのリーサムからの引用のうちの次の文章にある。

「どれだけの部分が実際の売買契約や販売のような真正の取引から生じたものか、またどれだけの部分が架空なもの [fictitious] で単なる融通手形であるか、すなわち架空な資本 [a fictitious capital] を調達す

62 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

るために手形が他の流通中の手形の支払いに振り出されるような場合、つまりそれだけの通貨が創造されることによるものであるか、を決定することは不可能である。」(Ms. I, S. 317; MEW, Bd. 25, S. 414.)

ここで「架空な資本」と言っているのは、「真正な取引」にもとづかないで振りだされた融通手形によって入手された貨幣額のことをさしている。注目されるのは、「架空な」にも「架空な資本」にも下線がつけられていないことである。この部分は、これらの語があるために引用されたものではけっしてない。「不可能」のところに下線があるように、下線を引くのを省いているわけでもない。もし、この冒頭部分で「架空資本」が1つの主題と考えられており、しかもそれとの関連でこの引用がなされたのであれば、その当の概念に下線がつけられないということは、マルクスの普通の下線のつけかたからして考えられないことである。だから、リーサムからのこの引用にこの言葉が出てくることは、第25章相当部分でマルクスが架空資本を論じようとしていた証拠にはならないのである。そして、マルクスの草稿の317—320ページのどこにも、これ以外に「架空資本」という言葉は出てこない。

そもそも第5章5)のなかで「架空資本」という言葉が出てくるのは、現行第29章相当部分を除くとそれよりあとのところの数か所だけでしかない。マルクスが使っている概念の意味はマルクスがそれを実際に使っているところから読み取られるべきだとすれば、5)の表題中の「架空資本」の意味も、第29章相当部分とそれ以降とに出てくる用例からつかまねばならないであろう。

第29章はエンゲルスの表題では「銀行資本の成分」であるが、ここにはマルクスの表題番号(「II」)がつけられており、それ以前の「I」とこのあとの「III」との関連で、この部分で明らかにされ強調されていることの中心をまとめれば、前掲の第2表に記したように、「銀行業者の貨幣資本マニド・キャピタルの大部分は純粋に架空なものである」ということになると考えられる。それほど「架空資本」はこの部分にとって重要な概念であるばかりでなく、

それが銀行の貨幣資本の特徴づけとして、5) 全体のなかの独自の項目(「II」)のなかで論じられている、ということに注目する必要がある。そこで、この「II」(現行第29章)のなかで「架空資本」という概念がどのような意味で用いられているかを簡単にみておくことにしよう。

マルクスはこの部分の冒頭で、

「II) 今度は、銀行業者の資本がなにかから成っているのかをもっと詳しく考察しなければならない」(*Ms. I*, S. 335; *MEW*, Bd. 25, S. 481), と言い、銀行学派が資本の循環形態としての貨幣資本と「利子生み資本」という意味での「貨幣資本」とを混同していることを指摘したのち、「銀行資本 [Bankcapital]」が一方では「1) 現金 (金または銀行券) と、2) 有価証券」とから成っているが、これは他方では「銀行業者自身の投下資本と預金 (彼の銀行業資本または借入資本)」とに分かれることを述べ、それに続いて、「いわゆる利子付証券」(*Ms. I*, S. 338; *MEW*, Bd. 25, S. 487) について立ち入って論じている。ここでの要点は、収益の資本化によって形成される「資本」は純粋に架空なものであって、その「価値」の変動は一般に現実資本の価値の運動とは無関係であるが、1国のいわゆる貨幣資本の大きな部分がこのような「架空資本」から成っている、ということである。

「しかしすべてこれらの場合、国家による支払がその子(利子)とみなされる資本は幻想的なもの、すなわち架空資本である。」(*Ms. I*, S. 336; *MEW*, Bd. 25, S. 482—483.)

「この取引はまだ何度でも繰り返されるかもしれないが、国債という資本は純粋に架空な資本であって、この債務証券が売れなくなれば、その瞬間からこの資本という外観はなくなってしまう。それにもかかわらず、すぐ見るように、この架空資本はそれ自身の運動をもっているのである。」(*Ebenda*; *MEW*, Bd. 25, S. 483.)

「架空資本の形成は資本化と呼ばれる、すなわち規則的な収入はすべて、平均利子率によって、この利子率で貸し出される資本がもたらすは

ずの収益として計算される。」(Ebenda.; MEW, Bd. 25, S. 484.)

「債務証書——有価証券——が国債の場合とは違って純粋に幻想的な資本を表わしていない場合でも、これらの証券の資本価値は純粋に幻想的である。」(Ms. I, S. 337; MEW, Bd. 25, S. 484.)

「たとえば、ある株式の名目価値、すなわち最初にこの株式が代表する払込金額が100ポンドであり、その企業がそれまでの5%にかわって10%をあげるなら、この株式の市場価値は200ポンドに上がる、すなわち倍になる。というのは、5%で資本化すれば、それはいまでは200ポンドの架空資本を表わしているからである。」(Ebenda.; MEW, Bd. 25, S. 485.)

「利子率が5%から2½%に下がれば、5% [ポンドと言うべき——引用者] をもたらす有価証券は100ポンドから200ポンドに上がる[steigt を stellt と誤記——引用者]。というのは、それらの価値は、収益が資本化されたもの、すなわち、収益が幻想的な資本にたいしてそのときの利子率で計算されたものだからである。」(Ebenda.; MEW, Bd. 25, S. 485.)

「すべてこれらの証券は、実際には、「生産にたいする蓄積された請求権」のほかにはなにも表わしていないのであって、その貨幣価値または資本価値は、国債の場合のようにまったくどんな価値も代表していないか、または、それらが表わしている現実の資本の価値とは無関係に規制されるのである。/すべて資本主義的生産の国には、このような形態での巨大な量のいわゆる利子生み資本または貨幣資本 [d. sog. Zinstragende od. moneyed Capital] が存在している。そして、貨幣資本 [Geldcapital] の蓄積といわれるものの大きな部分は、このような「生産にたいする請求権」の蓄積とこの請求権の市場価格(幻想的な資本価値)の蓄積とのほかにはなにも意味していないのである。」(Ms. I, S. 338; MEW, Bd. 25, S. 486.)

以上が、第5章5)で出てくる「架空資本」の最初のものであるが、見られるように、これはいわゆる擬制資本たる利子付証券のことである。マル

クスは、それらの価値は総じて「純粋に幻想的」であるが、とくに国債では「資本」そのものが「純粋に幻想的」であり、さらに譲渡できない収入源泉までも「資本」とみなされる場合——その極は労働力——を「純粋に幻想的な観念」だとし、

「こうして、資本の現実の価値増殖過程とのいっさいの関連は最後の痕跡にいたるまで消え失せて、自分自身を価値増殖する自動体としての資本の観念が固められるのである」(Ms. I, S. 337; MEW, Bd. 25, S. 484),

としている。

さて、マルクスは、このように利子付証券の架空性を明らかにしたうえで、ふたたび「銀行資本の成分」に話をもどして、次のように言う。

「さて、銀行業者資本の一部分はこのいわゆる利子付証券に投下されている。この証券そのものは、現実の銀行業務では機能していない準備資本の一部分である。[この準備資本の——引用者]最大の部分は、手形、すなわち生産的資本家や商人の支払約束から成っている。」(Ms. I, S. 338; MEW, Bd. 23, S. 487.)

これに続けてマルクスはいったん次のように書いたのち、消している。

「手形は、その名目価値とその市場価値とが異なるということによって、上で見た有価証券とは区別される。だから、手形は満期になれば、それが振り出されたときの[割引かれたときの、と言うべき——引用者]金額よりも大きい金額に転化させられるのである。」(Ebenda.) この抹消部分から、直前の文で、「最大の部分」と言っているのが、「いわゆる利子付証券」についてではなくて、「準備資本」についてであることがわかるであろう。これを消したのちに、マルクスは次のように書いている。

「貨幣の貸し手にとってはこの手形は利子付証券である。すなわち彼は、それを買うときに、満期までにまだ残っている期間について利子を引き去るのである。だから、手形が表わしている金額からどれだけが引

き去られるかは、そのときどきの利率によってきまるのである。」
(Ebenda.)

ここでは手形が「利子付証券」とされているが、この「利子付証券」という概念は広い意味で使われているのであって、さきの「いわゆる利子付証券」とは区別されなければならない。手形がさきに見たような意味での架空資本でないこと、その価値はけっして「純粋に幻想的なもの」でないことはいうまでもないことである(また、銀行資本の成分としての手形を論じているここでは、融通手形のようなものだけが問題になっているのでもないことも明らかである)。

続いてマルクスは、「最後に、銀行業者の「資本」の最後の部分は、彼の貨幣準備(金または銀行券)から成っている」(Ebenda.)、と言い、——預金は預金者が自由に処分できるものだが、通常はその「一般的平均はあまり変動しない」ということに触れたのち——次のように書いている。

「銀行の準備金は、資本主義的生産が発展している諸国では、平均的には、蓄蔵貨幣として現存する貨幣の量を表現しているのであって、この蓄蔵貨幣そのものの一部分はこれはまたこれで紙券 [Papier] から、すなわち、金にたいする指図証券ではあるが自己価値ではない単なる指図証券から成っている。それゆえ、銀行業者の資本の最大の部分は、純粋に架空なもの(すなわち債権)(手形および公債)および株式(所有証書、将来の収益にたいする指図証券)であって [D. größte Theil d. Bankers' Capitals ist daher rein fiktiv (nämlich Schuldforderungen) (Wechsel u. public securities) u. Aktien (Eigentumstitel, Anweisungen auf künftigen Ertrag)], この場合忘れてならないのは、これらの紙券が銀行業者の引き出しのなかで表わしている資本の貨幣価値は、その紙券が確実な収益にたいする指図証券(公債の場合のように)であるか、または現実の資本の所有証書(株式の場合のように)である場合でさえも、まったく架空なものであって、これらの紙券が表わしている現実資本 [d. Wirkliche Capital] の価値からは離れて規制される

ということ、あるいは、これらの紙券が単なる収益請求権を表わしている（資本を表わしていない）場合には、同一の収益にたいする請求権が、絶えず変動する架空な貨幣資本で表現されるということである。そのうえに、この架空な銀行業者資本の大部分は、銀行業者の資本を表わしているのではなく、利子がつくかどうかにかかわらず彼のもとに預金している公衆の資本を表わしている、ということが加わるのである。」（*Ebenda* ; *MEW*, Bd. 25, S. 487.）

以上は1つのパラグラフとなっている。ここで原文を挿入した部分は、パーレンの位置におかしいところがあるが、しかし内容ははっきり読みとれるであろう¹⁾。そのうえでこの部分を見ると、まず銀行の準備金の一部分は「自己価値ではない単なる指図証券」すなわち（他行の）銀行券から成っていることが述べられ、次に、そうだとすると、「銀行業者の資本」は——ごくわずかの地金準備を除いた——大部分は、銀行券（他の銀行業者への債権）、手形——これも「自己価値」ではない——、公債、株式、から成っているのだから、「純粹に架空なもの」だということになる、ということが述べられている。ここで「純粹に架空なもの」と言われているものが、上述の「いわゆる利子付証券」ばかりでなく、手形や、さらに銀行券までも含めたものであることは明らかであろう。すなわちここでは、およそ「自己価値でない単なる指図証券」を、自己価値でないがゆえに「純粹に架空なもの」としているのである。これは、さきの「いわゆる利子付証券」について言われていた「架空資本」とは異なる視点からの架空性である。このパラグラフの末尾で、「この架空な銀行業者資本の大部分は、銀行業者のもとに預金している公衆の資本を表わしている」と言っている場合の「架空な銀行業者資本」というのは、自己価値である地金を除いて、銀行業者の手許にあるすべての銀行券、手形、有価証券をさしているのである。

これに続いて、「預金そのものは二重の役割を演じる」（*Ms. I*, S. 338 ; *MEW*, Bd. 25, S. 488）ことを述べたあと、マルクスは今度は、この預金

について、その架空性を指摘する。

「利子生み資本と信用制度との発展につれて、同一の資本が、または同一の債権でしかないものが、さまざまの人手のなかでさまざまな形態で現われるさまざまな仕方によって、すべての資本が2倍に、またときには3倍にもなるように見える。この「貨幣資本」の最大の部分は純粋に架空なものである。たとえば、すべての預金は銀行業者への貸し勘定〔Guthaben〕にすぎないのであって、(準備金を除けば)それはけっして金庫のなかには存在しない。預金が振替取引に役だつかぎりでは、銀行業者がそれを貸し出したのちにも、それは彼らにとって資本として機能する。彼らは、これらの貸し勘定の差引計算によって、存在しない預金にたいして振り出された相互の小切手を支払いあうのである。」(Ebenda; MEW, Bd. 25, S. 488—489.)

ここでは、預金は準備金として銀行業者の手許に留められている部分を除けばすべてが「純粋に架空なもの」であることが述べられている。これは、すぐまえにみた「架空な銀行業者資本」の架空性とはまた異なった視点から言われているものである。すなわち、預金は、銀行業者によって貸し出されて——すなわち彼にとっての利子生み資本に転化されて——無準備となり、したがって架空なものとなったのちにも、彼にとって貨幣取扱資本として機能する、そういう架空資本になっている、というのである。

これに関連してマルクスは、「貨幣が資本貸付で演じる役割〔d. Rolle, d. d. Geld im Capitalverleihn spielt〕」についての A. スミスの記述を引用し、同じ貨幣がいくつもの商品資本の価値形態として機能しうること、そしてそのたびに「資本の価値定在」として貸付けられる可能性があることを述べ、さらに、この貸付について言えることは、「公衆が銀行業者にたいして行なう貸付」である預金についても言える、として、『通貨理論論評』からの引用を行なっている。これによって明らかにされているのは、同じ貨幣片で何度も預金されることによって何倍もの架空な資本が形成される、ということである (Ms. I, S. 339; MEW, Bd. 25, S. 489—490)。

最後にマルクスは、中央銀行＝イングランド銀行を考察に入れて、銀行業者の準備金の架空性を明らかにしている。

「この信用制度においてはすべてが2倍にも3倍にもなって単なる幻想的産物に転化するのであるが、同じことはまた、人々がやっとなにか確かなものをつかんだと思う「準備金」についても言える。」(Ebenda; MEW, Bd. 25, S. 490.)

ひとつは、私営銀行の準備金は中央銀行への預金となっているが、中央銀行ではこれまた無準備の債務となっていること、ひとつには、1844年の銀行法によるイングランド銀行の2部門分割によって「準備金」がこれはまたこれで「2重化」されるが、「これまた幻想的である」(Ebenda; MEW, Bd. 25, S. 491—492)ということ、この2つの架空性が示されている。

第29章相当部分でのマルクスの考察はここで基本的に終わっているが、以上述べたところから、マルクスがここで明らかにしようとしたのは銀行資本の架空性であることが確認されるであろう。そのさい、この架空性はさまざまな異なった観点からなされていた。第1に、「いわゆる利子付証券」＝いわゆる擬制資本の架空性。第2に、そのなかでもとくに、国債のように資本そのものがまったく幻想的なものと、第3に、株式のように資本価値が架空であるものとが区別される。第4には、銀行が保有する紙券は——他行の銀行券を含めて——自己価値でないという意味で架空であること、第5に、無準備となっている預金はすべて架空資本となっていること、第6に、準備金でさえ「幻想的」であること。そして最後に、預金と準備金とのところでより一般的に言われていたように、利子生み資本と信用制度との発展につれて、同じ資本が何倍にもなって現われるのであって、この貨幣資本の大部分は架空のものであること。この最後の点では、架空性は銀行資本のみについてではなく、信用制度下の「貨幣資本」一般について言われているわけである。

第29章にあたるⅡ)以降では、「架空資本」についてふれられるところはごくわずかになる。それを見ておこう。

70 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

「以上述べたところからわかるように、貨幣資本としての属性における商品資本 (d. Waarencapital qua Geldcapital) は、恐慌のときには(総じて不況期 [in times of pressure] には)減少している。同じことは、架空資本、利子付証券についても、それら自身が取引所で流通するかぎりでは、言えることである。……この架空な貨幣資本は恐慌のときには非常に減少しており、したがってまた、その所有者(銀行業者、商人、等)たちがそれをもって市場で貨幣を調達する力も非常に減少している。とはいえ、これらの有価証券の貨幣名の減少は、それらの所有者たちの支払能力には大いにかかわりがあるとしても、現実本とはなんの関係もないのである。」(Ms. I, S. 347; MEW, Bd. 25, S. 510.)
ここでは、一見して、さきに見た「いわゆる利子付証券」が「架空資本」と言われていることが明らかである。

「^{マニド・キャピタル}貨幣資本が存在する形態が、ただ、貨幣(金、銀、すなわち、その物質が価値の尺度として役だつ商品)の形態だけだと仮定しても、この^{マニド・キャピタル}貨幣資本の大きな部分はずねに必然的に単に架空のものである。……貨幣が^{マニド・キャピタル}貨幣資本に転化して、同じ貨幣が繰り返して^{マニド・キャピタル}貨幣資本を表わすかぎりでは、それはただある1つの点で金属貨幣として存在するだけだということは明らかである。他のすべての点では、それはただ資本への請求権 [claims] の形態で存在するだけである。……」(Ms. I, S. 355; MEW, Bd. 25, S. 524—525.)

ここでは、自己価値ではなくて債務請求権の形態をとっているいっさいの貨幣資本が「架空のもの」とされている。

最後に、草稿の364ページの末尾にあって、エンゲルス版に取り入れられていない部分を紹介しておこう。これは、エンゲルス版(MEW版)567ページに組み込まれている、キャップスの証言のあとに書かれているものである。

「信用制度がどのように、小生産様式を大規模な生産様式に転化させることを助けるか、については、ロンドンの家屋建築業を見よ。銀行法

報告。1857年。507, 508, 509ページ。

貸付可能資本の量はそれ自身の量にかかるだけではなくて、信用の状態にもかかっている。信用の状態が悪いときには、産業家たち自身の借入れが少くなり、第2に、銀行業者の貨幣資本^{マニド・キヤピタル}を成しているとんまたち [Esel] のほうは臆病になり、どんな条件であろうと「貸付け」ようとし²³ない。

架空資本（利子付証券）と、銀行券、銀行業者の手形、等々によって形成される信用資本〔つまり、あるやつ〔つまり銀行業者——引用者〕が信用そのものをふたたび、彼が売の商品にする場合〕とを、区別しなければならない。〕

ここで「信用資本」と言われているのは、銀行業者が他人資本＝銀行業資本 (banking capital) を貸付けている場合であるが、すでにみたようにこれもある視角からは——無準備の部分は——「架空」であるにもかかわらず、ここではそれと、利子付証券の形態で存在する銀行業者の資本とを区別しなければならないとし、後者を「架空資本」として前者に対比しているのである。

以上が第5章5)のなかで「架空資本」という言葉が使われている箇所である(エンゲルスが、自分によることを明記して、また明記しないで使っているところは別として²³⁾)。われわれは、第5章5)の「信用。架空資本」という表題のうちの「架空資本」を、以上見てきたような意味のものであると理解しなければならないであろう。そうであるとするならば、この5)のなかでは、「架空資本」はまさに第29章相当の「II)」でそれとして論じられていると言わなければならないであろう。この点からみて、第25章相当部分を「信用と架空資本」と呼ぶことには、大きな疑問があるのである。しかし、この点についてはさらに第25章相当部分の内容を確かめる必要があると思われるので、行論で立ち返ることにしよう。

- 1) エンゲルス版では、この部分は次のようになっている。「それゆえ、銀行業者の資本の最大の部分は、純粋に架空なものであって、債権(手形)、国債

72 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

証券(これは過去の資本を代表している)、および株式(将来の収益にたいする指図証券)から成っている。」(MEW, Bd. 25, S. 487.)

- 2) 「銀行業者の貨幣資本を成しているとんまたち」というのは銀行業者自身のことなのか、銀行に預金をしている「貨幣資本家」ないし生産的資本家なのか、判然としない。総じてこのパラグラフで言われていることの意味にはよくわからないところがある。エンゲルスが省いたのもそのせいかもしれない。
- 3) たとえば、現行版第25章の後半で「II.」とされているところの末尾にエンゲルスは、彼によることを明記して「書き入れ」をしているが、このなかで、「架空資本を製造するこの方法」(MEW, Bd. 25, S. 424)と書いており、第29章の最後の注では、「1844年の銀行法の停止は、イングランド銀行が自行保有の金準備による保証を顧慮しないで任意の額の銀行券を発行することを許す、つまり任意の額の紙幣の架空な貨幣資本を創造し、これで諸銀行や手形仲買人に、またこれらの手を経て商業に、前貸をすることを許すのである」(MEW, Bd. 25, S. 492)、と書いている。

彼が、彼によることを明記しないで「架空資本」という語を使っている例としては、次のようなところをあげることができる。

「イングランド銀行がその地下室にある金属準備によって保証されていない銀行券を発行するかぎりでは、この銀行は価値章標を創造するのであって、この章標は流通手段を形成するだけではなく、この銀行にとってこの無準備銀行券の名目額だけの追加の——架空だとはいえ——資本をも形成する。そして、この追加資本はこの銀行のために追加利潤をあげるのである。」(MEW, Bd. 25, S. 557.)

この文章はエンゲルスによるものである。

9. 草稿と現行版第25章との対応

前節冒頭で述べたように、現行第25章は、草稿5)の後のほうからエンゲルスが取り入れた若干の個所があるが、それ以外は5)の始めの部分から取られている。しかし、マルクスの草稿が十分に仕上げられていないという判断からであろう、エンゲルスはかなりの置き換え、削除を行なっている。本節では、まず草稿の状態の概要を述べ、エンゲルス版との対応関係を示したのち、次節で草稿の該当部分の全文を紹介しよう。

7. で述べたように現行第26章冒頭でノーマンの批判にはいるまえまでの

ところは、草稿318—321ページのいわば雑録的な部分の最後のところをなしているものと思われる。そこで、ここでは、この321ページまで（厳密には322ページの1行目まで）を一括して紹介することにしよう。

全体は大きく3つに分けることができる。

第1は、5)のテキストをなすべきものとして書き始められたことが明らかな、最初の本文部分であって、エンゲルス版では、第25章の冒頭から、「特殊な信用諸機関ならびに銀行そのものの特殊な諸形態は、われわれの目的のためにはこれ以上考察する必要はない」(MEW, Bd. 25, S. 417), としているところ、といってもこの部分から、リーサム、ボウズンキット、トゥック、コ克蘭の各人の著書からの引用の個所(MEW, Bd. 25, S. 414—415)を除いたものにあたる。この部分は、草稿317ページの上半部全体を埋めたのち、次の318ページの上半部の上から約4分の1までに書かれている。

第2は、上の本文への注である。マルクスは本文のなかに注番号をつけ、ページの下半部に注を書いている。しかし、本文が2ページ目の318ページ上方で終わっているのに、注はこの2ページの下半部だけでは書ききれず——といっても各注のあいだに多少の空きがあるところもある——次の319ページの下半部に続き、その最下部でやっと終わっている。本文には次の注番号がある——a), b)^{a)}, b), c), d), e), f), (g)^{a)}, (g)^{b)}, h), i), j), (1), (2)。このうち、d)とe)とは、下半部にいったん番号をつけたものの、縦線で抹消され、注は書かれていない。f)は「f) ギルバート。」と書いたのち、抹消している。317ページには a), b)^{a)}, b), c), 「注a)に[ad Note a)」、 「注 a および b に [ad note a u. b.]」、の各注、318ページには「注 a に [ad Note a)」、 g)^{a)}, g)^{b)}, h), i), j), の各注、319ページには j) (jは2つある), 1), 2), の各注が書かれている。

第3は、以上の本文および注に関連する材料として書かれたと思われる部分——本稿では「雑録」と呼ぶ——である。これには、ただ引用文だけを掲げているところとマルクスが自分の文章を書いているところとがいく

74 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

つかあるだけで、基本的にははじめになんらかの見出しがないしそれに準じるものがあり、そのあとに引用文がくる、というものから成っている。これは、318ページ上半部の上から4分の1ほどのところで終わっている本文の直後から始まり、318および319ページの上半部——どちらも下半部は注に使われている——を埋めたあと、320、321、の両ページの上半部下半部を通して書かれ、322ページの1行目で終わっている。その最初のものは「注1) (318および319ページ)へ[Zu Note 1) (318 u. 319)]」とあり、これはおそらく、318ページの本文に注番号があって注が319ページの下半分に書かれている注1)のことであろうと推定されるので、この雑録を書き始めるときには、すでに318および319ページの下半部の注は書かれていたのではないかと思われる。すなわち、まず本文と注を書き、そのあとで雑録の部分にかかったのではないかと思われる。そういう経過から、このなかには第2の注のグループに属するものとして、いまふれた、「注1) (318および319ページ)へ」のほか、「注1, 318 ページ, へ [Zu Note 1. 318.]」, および、「注 h に。 318 ページ [ad Note h. p. 318]」が含まれている。

以上の3つの部分を使ってエンゲルスは第25章と第26章のはじめの部分をつくった。ここで、マルクスの草稿がエンゲルス版にどのように利用されたか、エンゲルス版の各部分がマルクスの草稿のどこから取られているかを示す第3表を掲げておこう。草稿の本文も注も雑録も、そのすべてを次節で紹介するので、ここでは草稿のそれぞれの部分の内容はごく簡単な見出しと、引用ページないし引用証言番号だけを記すにとどめるが、次節の各部分との関係を容易につかめるように、左端に、次節で用いる草稿ページの指示記号をつけておく(詳細は次節を見られたい)。現行版のほうも、MEW版のページとごく簡単な見出しとを記すだけにするが、どの部分をさしているかは、容易にかつ誤りなく判断されうるものと考えている。

この表を見られればすぐわかるように、エンゲルスは、マルクスの注のうちから、リーサム、ボウズンキット、トゥック、コ克蘭の引用を本

第3表 草稿第5章5)の冒頭と現行第25章および第26章冒頭との関係

草稿 ページ	第3部第1稿	MEW. ページ	現行版第25章
317上①～ 317上③ 317上④～ 318上②	[本文] 2パラグラフ…………… 6パラグラフ…………… [本文への注]	413	[本文2パラグラフ]
317下① a)	『経済学批判』, p.122sq. ---		
317下② b ^a	オプダイク, p.323, 326; 326. ギルバート, p.151.		[この55は不要であろう]
317下③ b)	リーサム, p.56, 3sq., 8, 11, 43, 44. ---	414	リーサム, p.55, 56, 3, 4, 8, 11, 43, 44.
317下④ c)	コ克蘭, p.797. ---		ボウズンキット, p.86, 92, 93, 93.
317下⑤	「注a)に」『通貨理論論評』, p.29.	414	トウック, p.87.
317下⑥	「注aおよびb)に」ボウズンキット, p.82, 83, 86, 92, 93. ---	415	コ克蘭, p.797.
	d) [注番号抹消]	415	[本文5パラグラフ]
	e) [注番号抹消]	415-7	
318下①	「注aに」トウック, p.87. ---		
318下② g ^a	トウック, p.36, 37. ---	417	トウック, p.36, 37.
318下③ g ^a	スコットランドの諸銀行で の, 銀行券での前貸。		
318下④ h)	(319ページの「注h)」を見よ)		
318下⑤ i)	『商業的窮境』1847年, No. 4636, 4637, 4645.		『商業的窮境』1847年, No. 4636, 4645; 901-904 [MEW. では905-902と誤記], 992. [以上, エンゲルス版では要約 のみ]
318下⑥ j)	ロイド銀行のべてんを見よ。 『商業的窮境』1847年, No. 901, 902, 903, 904, 992.	417-8	
319下① j)	フラートン, p.38, 46, 51, 95 note. ---	418	フラートン, p.51.
	『通貨理論論評』, p.40.		
319下② 1)	ロイド。『商業的窮境』1848年, No.37, 63. ラゲー, p.204 note.		
319下③ 2)	預金。『通貨理論論評』, p.62, 63. ---		[本表次ページへ]
	[雑録]		
318上③	「注1) (318および319ページ)へ」 ギルバート, p.117, 118, 146, 119, 120. ---	418-9	ギルバート, p.117, 117, 118, 146, 119, 120.

76 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)

318上④	準備金の節約。預金。小切手。ギルバート, p.123, 124, 124.	→419	ギルバート, p.123, 124.		
318上⑤	銀行の組織化について。ギルバート, p.127, 134.	}	{		
318上⑥	銀行業と投機。ギルバート, p. 137, 138.			ギルバート, p.127, 134, 137, 138.	
319上①	手形の割引によるさまざまな事業部門への諸資本の配分。ギルバート, p.153, 154.	→419-20	p.172, 174, 175, 180, 181.		
			[本表前ページから]		
			↓		
319上②	「長期手形は投機を助長する。」ギルバート, p.156.	420	『通貨理論論評』, p.62, 63.		
319上③	「注1, 318ページ, へ」ギルバート, p.172.	}	}		
319上④	当座貸越, 過振り。ギルバート, p.175.			420-3	[エンゲルスの挿入]
319上⑤	商品担保の前貸。ギルバート, p.180, 181.				
	[草稿361ページ]	→423	I.		
319上⑥	「注hに。318ページ」手形と積荷証券への貸付とによる, 東インド貿易でのいかさまについて。『マンチェスター・ガーディアン』1847年11月24日号。	→423-4	II. 『マンチェスター・ガーディアン』1847年11月24日号。 [エンゲルスの挿入]		
319上⑦	現金でなく手形での支払。『商業的窮境』1847年, No. 7, 16, 17, 18, 20, 21, 25.	→424	III. 『商業的窮境』1847年, p.26, 27.		
320①	1847年の春(4月)には.....。同上, No.177, 521, 522, 526, 207, 1754, 1755, 205, 231.	→425	同上, p.41, 42, 66, 67, 43, 44, 159.		
	[このうちNo.231のみ].....	→[MEW, Bd. 23, S.502, Z.32-37]			
320②	手形が銀行業者の準備金となる。同上, No.352.	→425	同上, p.53.		
320③	投機手形。綿花手形。同上, No. 5092, 5094, 600, 601.	→426	同上, No.5092, 5094, 600, 601.		
320④	東インド市場(および中国市場)での大過剰取引(1847年)。同上, No.677, 687, 688, 689, 786, 971.	→426-7	同上, p.78, 79; No.786, 971.		
	[草稿370, 369ページ]	→427-8	IV.		
	[草稿352bページ]	→428	V.		

現行版第26章

- 321① 貨幣資本の蓄積とそれが利率に
及ぼす影響。「通貨理論論評」、
p.32sq, 36. -----→ 429 『通貨理論論評』, p.32-34,
ハッバード, p. [40-]41, 42, 36.
68. -----→ 429-30 ハッバード, p.40, 41, 42,
68.
- 321② 1846-47年。
『商業的窮境』1847年, No. 430-32 『商業的窮境』1847年, p.
648, 730, 1664, 1763, 3645, 74, 75, 81; No.1664,
3800, 3846, 3848, 4356, 4357, 1763; p.301, 312; No.
4358, 4359, 4360, 4361. ----- 3846, [3848]; No.
321③ 銀行業者による退蔵。同上, No. 4356-4361.
4605. -----→ 432 同上, No.4605.
321④ 第4691号。同上, No.4691. -----→ 432 同上, No.4691.
321⑤ 資本の価値。同上, No.4777.
321⑥ 信用の容易さ(貨幣の豊富さ)。
同上, No.4886, 5080.
321⑦ 逼迫期に貨幣取扱業者がどんなに
はげしく暴れまわるかについ
て……。同上, No.5451. -----→ 432 同上, No.5451.
321⑧ [マルクスの覚え書き]
通貨, 貨幣, 資本。『ジ・エコノ
ミスト』, 1845年度, p.238.

文の途中に挿入したが、これ以外の注と雑録とはほとんど区別なしに取扱って、本文のあとに置いている。マルクスの雑録のなかで「注1」へ(318および319ページ)、「注1, 318ページ」, 「注hに。318ページ」とされている3か所も、ほかの部分と区別されることなく、書かれている順序どおりに並べられている。こうした状況からみて、エンゲルスが、注番号による本文の特定箇所への関連づけは重要でない、と判断したことはほとんど確実である。この判断が内容の分析によるものか、それとも、口述筆記でつくられた写しが草稿の状態を細かいところまで再現していなかったために生じたものかは、わからない。ただ、後者の可能性もあることだけは留意しておく必要があると考える。

(1983年7月28日)